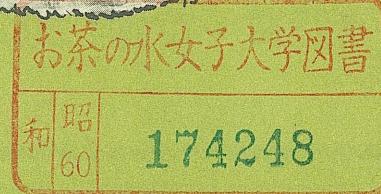


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



TAN.



1

第八十三卷第一号
日本幼稚園協会

幼児の動きのリズム

新版 自由表現ABC

子どもの創造性を育てる自由表現

感情のおもむくままを自分の体の動きで示す自由表現は、子どもの創造性を育てる第一歩になります。

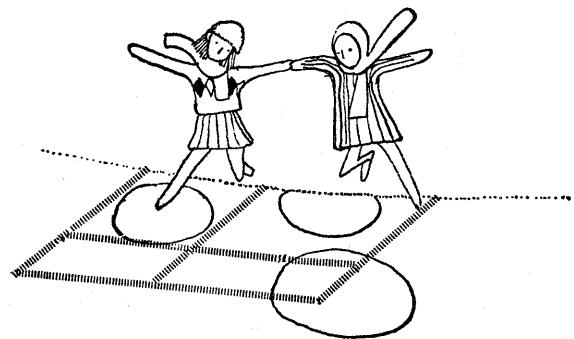
本書では、子どもの単純な自由表現から出発し、それを発展追求して肉づけし、最終的には舞踊劇の作品に仕上げるまでをわかりやすく解説しました。

振付け、楽譜をつけ、保育者の方々が使いやすいよう編集してあります。

藤田妙子・著

B5判・128頁・定価1,300円

幼児の教育



第八十三卷 第一號

幼児の教育 目次

— 第八十三卷 一月号 —

魅せられるもの

—一九八四年、いま、ここに—— 河辺 崑 (4)

保育の原点をさぐる..... 三宅 廉 (7)

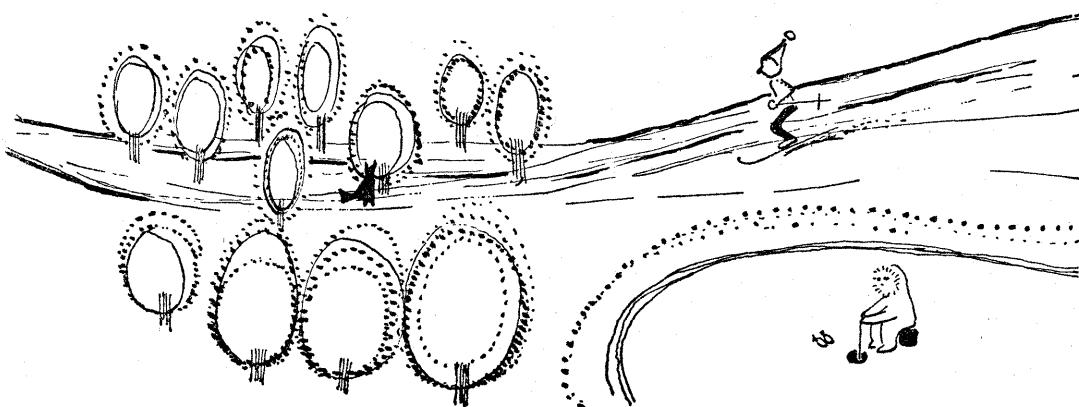
『新しい人よ眼ざめよ』

——絶望の時代に希望を見る—— 本田 和子 (14)

日本におけるスポーツの夜明け

——日本の女子陸上界・硬式テニスを中心にして—— 平野 久子 (20)
福田 富美子 (20)

© 1984
日本幼稚園協会



いろいろなことを教えてくれる子どもたち① 村石京子 (39)

赤本「風の嫁入」にみる

教育的位置と多様性 森下みさ子 (42)

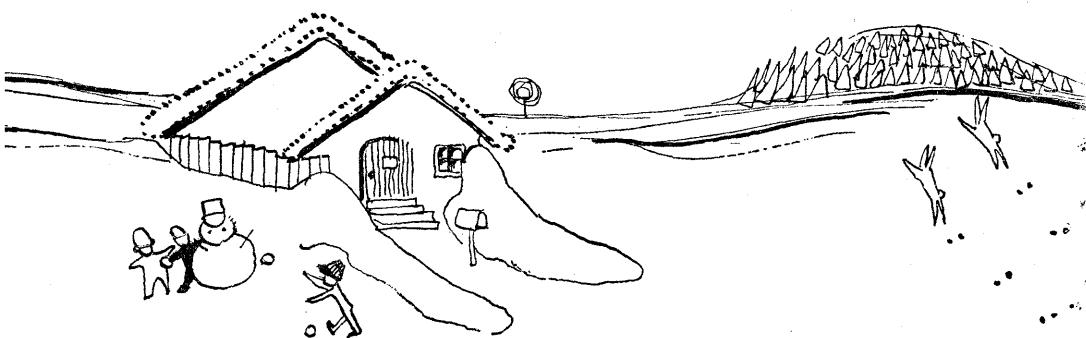
◆子どもの作文から 森下みさ子 (42) (56)

★倉橋賞受賞研究

幼稚園における障害児の集団適応の研究

平岩定法 赤塚大樹
斎藤美代子 小島恵美代
加藤道子 伊藤洋子 (57)

表紙 安井淡
表紙題字 比田井和子
カット 福田理恵



魅せられるもの

一九八四年、いま、ここに――

河辺　　果



数年前ヨーロッパの美術を訪ねた時、旅の終着点ローマで古代に出会い、心をやさぶられたのを想い出すが、はからずも昨夏エジプトで短時日ではあったが、五〇〇〇年前の古代を目のあたりにすることができ、強烈な印象を受けて帰国した。

エジプトの中央を流れるナイル流域の黒い土（ケメト）と呼ばれるわずかな耕作地を除き、九七パーセントがなにものも寄せつけない赤い土（デシレント）、つまり砂漠であ

るという大自然が古代エジプト人の思想や宗教等の独自な文明の形成に大きな影響があったことはいなめない。広大なセピア色の砂漠を空から眺めた時も実地に果しなく続く砂漠の一端に立った時も「砂漠はエジプト人の心の中に生きつづけている」という強い感動をおぼえた。それは天に続くような水平線の砂漠から昇り砂漠に没する太陽の明の世界と星空しか見えない冷たい闇の世界に「生と死」を、さらにナイルの洪水のあとに沃上が残されて耕地が再生されたことから「死と再生」を、それぞれ人間の輪廻転生の想念を深めていったに違いないと感じたからである。

さらに現世にまで残されて来た古代エジプトの遺跡の偉大さや未だなお謎につつまれた不可思議さに心をうたれると共に、それらの遺跡のほとんどが、耕作地と砂漠の境界（はざま）に存在することにもなにか人間の根源的な生き方にかかわりがあるようにも思われたことである。そこには制約ぎりぎりの中に自由なイメージや思索をいかに現実化していくかという絶えざる対決が宿命づけられて来たのではないだろうか。特にサッカラをはじめギザのピラミッドこそその最たるものと思う。対立するものの統合の最も美しい表現を曼荼羅と呼ぶが、私はこのピラミッドこそひとつ曼荼羅だと思った。ヒエログリフ（聖刻文字）による碑文の発見をまつまでもなく、それは古代王朝の專制で実現されたものではなく、「天の神（祖先）への階段」をという国王の夢が庶民の祈念ともなり歓喜と真剣な精進によって現実化されていったに違ないと考えたい。そこに現代の科学すら及ばないものが実現されたのである。

首都カイロはホテルや商社や官庁などの近代的なビルを除いては建ててはいるのかこわしているのかわからないような日乾燥瓦の街並みに黄色い砂塵と混雜する自動車の群、そこにはクラクションの響きがうずまいていた。この黄色い喧噪の世界に見たものはいきいきと呼び交わすたくましい人々の動きと昼の静かなひとときアカシヤの街路樹の蔭からひびいてくるコーランの祈りの声であった。大衆の活動的な生活は古代エジプトの生活が描かれた葬祭殿や墓の内部を飾るレリーフなどの壁画の中にも充分うかがうことができ、五〇〇〇年の古代がいまも現代に息づいているかのようにも感じられた。そこにあるものは太陽の力を得て洪水のあとの大土から芽を吹く草木の再生にも似た人間のたくましい生命力そのものと生活というさまざまなものであつた。

これらは短時日にかいま見聞したエジプトの寸描であり、この見聞した事実になにも付記するものはない。ただ私にとって魅せられるものは何であるのか。それは大自然と共に生きる人間のいきいきしさであり、制約の中にいかに自由な自己の生命を生き現実化させて来たかという古代からのエジプト人たちの姿であり、その姿がそのまま、いま、ここに、土や泥や砂や水にまみれている幼児たちの姿と重なつたことである。一九八四年の時を迎える。来る年も、きっと、もつと、幼児との生活や教育に喜びと真剣さをおぼえたいことを祈りたい。

(洗足学園短期大学)

保育の原点をさぐる

註　これは昭和五八年九月六日、奈良県文化会館に於て開催された日本保育協会主催全国保母養成セミナーの特別講演として口述したもの要旨である。

私のような小児科医師が、現場で苦労している皆さん前に立つ資格が問われると思うが、皆さんとの共通点は毎日こどもと取組んでいることで、私は約五十五年の間数多くの母と子に接して來た。何故私がこどもが好きだったかというと、その発育の神秘に心が惹かれ、エネルギーのかたまりで、しかも未完成で、未来に向って可

能性に満ちていて興味をもっていたからだ。この点は皆さんと共通している接点だと思う。

私の持論は小児医学は小児教育学だということであり、従つて私は臨床医学の傍ら小児保育学を、ことにその思想を勉強して來た。そのため今迄に京阪神にある幼稚園々児の母親達に教育講演を度々行つて來た。一方保育学科をもつ大学の講座を担当、京都の華頂短大に二十五年間、神戸の頌栄短大に三十年間、小児科医の立場から保育学を講義して來た。そして一人でも多くよき保育者

三　宅廉



を養成したいというのが私の夢であった。

そこへ幸いよき機会に恵まれて一昨年フレーベル研究の第一人者莊司雅子先生を団長とする歐州幼児教育視察団に加えられ、近代保育の源泉を探ることになり、ヨーロッパに於ける保育の実情と、その基礎をなした近代保育学の先輩達の活躍の跡を自分の眼でたしかめしたこと、更に又昨年頃榮短大の創始者ハウ先生の母教会であるシカゴのベタニー・ユニオン教会に学生を引率して出かけ、私の長年に亘る保育学に対する考え方をまとめることが出来たので、これを披露し聊かでも皆さんのが今後の御活躍に御参考になればと思ひ、茲に立った次第である。

今日の主題は保育を二つの方面から話をして、その原点を探つてみると、先ず初めは保育を年令的、医学的或は教育学的に考えることから始めてみたい。

私は昭和三年に大学を出たが五年たつてから生れ立てのこども（之を新生児とよぶ）に興味をもち始めた。当時、新生児は婦人科と小兒科の間に挟まれ、所謂闇の谷間にあつて医学的に不明瞭なことが多く、死亡率も高

く、死亡すると一様に先天性生活力薄弱児と診断され、幸い生命をとりとめても心身障害者となることが多く、甚だ未開発の時代であった。

そこで私は大学を辞し小兒科と産科と協力し合う病院（今のパルモア病院）を建設し日本で最初の周産期病院をつくったのである。その後今までに私は二万人に及ぶ赤ん坊の出産に立会い人間の最も大きな危機を見届け、その後育ちゆく姿を追跡、十五才を迎えたとき同籠記念会なるものを開いて一堂に招集し、両親につれられた青年と再会、劇的な握手をし激動することを私のライフワークとして来た。

以上の経験から知り得たことは、保育の原点は胎児、更に新生児であるということである。即ち人間形成の原点、換言すれば人づくりの第一歩は直径○、一三耗の受精卵であり、このとき既に人としての設計図が出来上つているのである。このいのちのもとは二万の遺伝子をもつDNAであり、更にRNAを介して細胞内にリボゾームを作る。その後、六週間で脳、肺、肝、腎、眼、耳、

が、十週間で心臓が完成し、四ヵ月では自我が芽生え、五ヵ月では触覚、味覚、六ヵ月では聴覚が働き出し母と子が互いに信号を送り合うことが認められ、母子ともに、体液、血液のバランスを保ち同じリズムで呼応し合つて居ることが超音波などによる研究で科学的にうらづけされたのである。こうなると、紀元前四百年のプラトンによる「子どもの教育は胎内から」ということ、フレーベルによる「教育は受胎告知のときから」ということが立証され、レオナルド・ダビンチが「胎内では一つの魂が母子という二つの身体を支配している」といったことも領^{ウツメ}けるし、江戸時代の稻生医師の「母と子は一氣であり、母の心のさまを子の心にうつし、母の身の働きを子の身にうつす。母の心よこしまなく、すなおなれば、

生れる子の心も正しい」といたことは真理で、胎児は決して欺くことが出来ない。胎児の最も尊いことは無限の多様性の中に夫々異った個性をもつていて、その独自性の故に全くかけがえのないことを示している。これが脳髄に於ける神経単位（ニューロン）の特異性で

あり、神經細胞から出る樹枝状突起による配線工事こそ、ローレンツの唱えた尊い「刷り込み」現象で、之が胎生六ヵ月から初まる消え難き學習であるとすれば人生の方向づけはこゝでおおよそ決められてしまう。

こうして始められた教育は母と子のきずなに基く個性の伸展であるといえる。更に分り易くいえば、母と子の基本的信頼に根ざす安定性と持続性、これを基盤とした家庭の中での自由、個性、自然教育である。

しかし現代の教育は、個性を無視し、形式的、規定的、画一的、命令的、干渉的であり、目に見える知識、技術の優先が目につくのである。ここで一度、保育の原点に立戻つて出直す必要があるのでなかろうかと思う。

そこで私は第二の問題に移り近代保育学の先覚者の精神に立ち返つて、教育の原点を考えてみたいと思う。それを駆り立てて呉れたのは、このたびの欧洲に於ける幼児教育誕生ゆかりの地の訪問であった。

先ず保育者の先覚者とは誰か。それはいわゞもがな、

スイス、ジュネーブのルソー。チューリッヒのペスタロッチ。東ドイツ、ウアイスピッハのフレーベルである。彼らは近代幼児教育の基礎を作りヨーロッパの夢を醒したのであるが、それでは三人の現われる以前のヨーロッパはどうだつたか、それはこどもを小型の大人と考えて居り、いわばこどもの中に大人を求めていたともいえよう。

ルソーの代表作「エミール」（一七六二年）の出た頃のフランスの教育状況はこの著作の中で手にとるように分る。誠に目にあまるものがあつたようで、専ら伝統的であり自然に反し強制的であり、服従、命令、干渉、束縛を旨とし、こどもの本質即ち発育を理解せずこれを無視した所にルソーが目をつけ革新的な新教育を唱え、これをエミールの中で発表した、そのあとゲーテが言つたように「ルソーと共に新時代が始まつた」のであつた。

かくしてルソーにより新幼児教育の火の手があげられ

そのエミールをチューリッヒの大学生時代に読んだペス

タロッチがその思想を引きつぎ、更にフレーベルがペスタロッチの新教育をイベルドンで見学し、ドイツに帰つてキンデルガルテンの創設をしたのである。この思想が日本にも引つがれ、ペスタロッチは長田、小原へ、フレーベルはハウ、石原、倉橋、莊司と引きつがれていつた。

今述べた人達の考へた幼児教育の原点は、先ずこども一人一人にかくれたいの、ちのあること、このいのちは神から委託されたもの、換言すればこどもを神の子と考える。即ちこどもは生れながらにして神性をもついのちであることと口を揃えて強調したのである。従つて先ずこどものいのちは尊重すべきものであり、これを育くみ導き最高に生かすことが保育の目的である。これが私共大人的教育者の使命であるとする。たしかに私達は、アメリカの聖者アルベルト・ショワイツァーのいつたように、「生きようとするいのちにとりかこまれた、生きようとするいのち」なのだ。

何といつてもこの世の文化は生命の畏敬から始まる。

そうすると次に考えられることは、こども一人一人に尊い個性が與えられているということで、これをルソーが強調し、ペスタロッチに受けつがれた。彼はその個性を隠れた生命とよび、且つ神性とよんだ。その夫々のもつ尊い個性を未知の鉱脈のように発見し、これを自由に、自然にのばすことをルソーはエミールで主張した。これがゲーテ、カント、トルストイにまで大きな影響を与えていた。このたび、旅行で知ったことだが、トルストイが十五才の時に既にルソーに傾倒し全書を読破して居るのに驚いた。彼の出生地ヤスヤーナ、ボリヤーナを訪ねて深い感慨に耽った次第である。

かさ、視野の広さ、美しい情操が育ち、惹いては平和を愛する心が育つ、フレーベル以上に花と音楽を尊重したのは、神戸の頌栄でフレーベリズムを紹介したハウ女史で、彼女が神戸で活躍中、折しも日本に教育勅語が發布されたのであったが、これを日本のことにも教えることが、如何におさなごの平和な心を損うかを憂えたといふ。

このたびノーベル賞を得た京大の福井教授の感想を聞いても、彼はこのたびの研究の端緒は、たゞ自然を愛しファーブルの昆虫記に心惹かれたことであったという。私共の耳を傾けるべきことだと思う。

次にかの三人の先覚者が口を揃えて強調したことは、広い意味で、こどもを取り巻く環境の重要性である。その第一は自然である。先ずルソーは自然の本質は神である。それを力説したのはペスタロッチとフレーベルであった。前者は実母のスザンナと手伝のバベリから受けたこそ私共の教師だということである。そのことにはペスタロッチも同じであり。フレーベルは自然に親しむことこそ幼児教育の第一歩であると言った。そこから心の豊

る母による愛情の刷り込みが素晴らしいことを物語り、幼いもの程家庭環境の影響を受けることの大きいことが、ミドナップールのカマラ、アマラの狼的環境による結果をまつ迄もないことを教えている。

このようにこどもは既に母の胎内にいるときから、そのきずなが感覚によって刷り込まれ、母の声を聞き分けスキンシップによつてつながり、生れてからは眼と眼によつて接触し更に母乳をたしなむことによつて基本的信頼が培われ、その印象が全生涯に及ぶとすれば、母の役割が想像以上に大きいことを知るのである。

従つて幼児教育の第一歩は母親に対する教育であることに気づいた人がいる。それはフレーベルで一八三九年初めて母親の講習会を開き、保育者の使命はこどもよりも母親への教育であると主張したのである。

以上をまとめると、母親に対しては、母親とこどもが愛と依存から出発し、その愛情が本能的な感情と行為に走ることなく、神の前に敬虔な理性に富み、こどもの本質と個性を理解し、こどもが何を必要としているの

か、何を求めているのかを見抜く眼と知恵をもち、自愛性、自主性、創造性を養わせることに努め、とくに模倣期にはよきモデルとなるため言動を慎しみ、責任をもつて行動することであり、こどもの自我の芽生えに当つては冷静に観察し、深い思いやりをもつて導くことが何よりも大切で、そのためにはその母親を指導するよき保育者が何よりも必要だと思うのである。

最後に皆さんに紹介したいことは、神戸の頌栄学園にキリスト教保育を導入したハウ女史が、幼児に生きる保育者の卒業に当つて贈つたことばで、それは第一に幼児の靈的生命の尊重、第二に知的より情操の涵養、最後に最高の保育技術の修得と結んでいることで、そこに女史の面目を窺い知ることが出来ると思う。

なおこの際つけ加えたいことは、このたびの旅行で、スイスの古都ベルンを訪ねたときに知つたことであるが、この街には人間教育の発祥地であるといふさわしい事実がある。それは先ず初めにルソーがエミールの出版によつて当時の人達の眼を醒まし、激昂を買ひ、

パリを追われてイベルドンに身をひそめた事実があること更にペスタロッチがエミールの感化を受け、それが献身の導火線となって、このイベルドンに於て新教育を実践したこと、その学園が極盛に向っているとき、フランクフルトにいた二十八才のフレーベルが、恩師にすすめられて、このイベルドンのペスタロッチを訪問、二度目の訪問では滞在二ヶ月に及び、新教育の見学により夢を燃してドイツに帰りブランケンブルクでキンデルガルテンの名を思いついたのであり、奇しくもこの三大教育者が時代を異にしてイベルドンを往来し、夫れ夫れの夢を完成した事実を知り感慨深く、美しいヌンヤテル湖畔に立つて、しばし瞑想に耽つたのであった。そのとき偶然すばらしい機会に遭遇した。それはペスタロッチが当時若かったフレーベルに書き送った手紙を読んだのである。それは保育者としての心構えを淳々と説いたもので、その後の町で、Schweigen und Tun (沈黙と実践) ということばを書きしるし、教育者はただ黙々とその理想を実行に移すことで、それが大切な金科玉條であ、こ

とを述べ、かくしてこどもに内在する生命力をのばすことに傾倒すべきだと結んでいる。流石にすばらしい教育者の手紙だと思う。

終りにのぞみ年老いた私から遺言として一言、我国の幼児教育の第一線に立つて活躍して居られる皆さんに送りたいことばは、これから多難な未来を背負つて居る子ども達に心豊かな、視野の広い、自然と愛に生きる平和なこどもとして育てて戴きたいことで、最近ある未来学者が「こんな科学万能の時代がつづくと、廿一世紀は哲学と宗教の時代になるだろう。そうでないとみんなが生きて行けなくなるのではないか」といったことは味うべきことばではなかろうか。どうか皆さん、一人一人の子どもたちの意義を知らせるために、母とこどものきずなから始める母親への教育、心の豊かな、しかもお互いに共に生きる精神をもつこどもを育てる母親への指導が何よりも大切であることを力説して私の貧しい講演を終る。

(ペルモア病院)

『新しい人よ眼ざめよ』

——絶望の時代に希望を見る——



本田和子

☆ ☆ ☆

——お父さん！お父さん！あなたはどこへ行くので
すか？ああ、そんなに早く歩かないでください、話
しかけてください、お父さん、さもないと僕は迷い
子になってしまふでしょう——W・ブレイク「失
なわれた少年」『無垢の歌』より

て父の姿を覆いかくし、泣きじやくる子どもの肩を冷く
濡らしている。「おくれてきた人」である子どもは、置
き去りにされる不安に常に脅えつつ、暗い夜をさまよい
歩く宿命を、避け難く負わされているのだ。「子ども」
に近付き、彼らについて何事かを語る行為は、先ずはこ
の痛みの共有の上に成立すべきものに他なるまい。

大江健三郎著『新しい人よ眼ざめよ』と題されたこの
作品集、父親と障害を持った息子との限りなく美しい共
生を描いた物語群は、W・ブレイクの右の詩篇をモチー
暗い夜の森で、子どもは露に濡れて泣いている。行方
を見失った父親を求めて……。森の闇に、霧は濃く流れ

フとした一篇を冒頭に置いて、作品世界の幕を開けた。

そして、ブレイクの『無垢の歌』と『経験の歌』は、七つの連作を貫流する主旋律である。それは、私どもの心の奥深くに潜む「子どもへの想い」を不斷にかきたて、

共鳴し合い、それらを増幅させて、宇宙の極みまで無限

に鳴り響く聖なる楽の音へと、変貌させようと迫るのだ。作品集の冒頭を飾る一篇は、『無垢の歌、経験の歌』と題されて、まさしくブレイクの詩集そのものを表題に選び、ブレイクとの抜きさしならぬ深い結び付きを、鮮明に歌い上げていた。一八世紀英國ロマン派の一詩人、子どもの「無垢イメージ」の源流に位置するこの人こそ、いま、共に聖なる楽音を奏し合う、またとなき共演者なのだと……。

そして、最終篇『新しい人よ眼ざめよ』は、ブレイクの予言詩『ジエルサレム』中の、イエスとアルビオンと

の確信に満ちた美しい会話から、一節を引くことで結ばれている。

—— 恐れるな、アルビオンよ、私が死ななければお前

は生きることができない。

しかし私が死ねば、私が再生する時はお前とともに
にある——

重い障害を負った息子との、苦難に満ちた共生の歩みの中から、こうした再生の希望が導き出されたことで、作品世界は、とりあえずは一つの閥門を通過した。そして、二十才を迎えた障害児と、小柄な身体でさりげなく、しかもしっかりと兄を支えるその弟に、次代を託しつつ自身の老いへとまなざしを向ける父親、この三つのまんじの放つきよらかな残光に彩られつつ、作品世界の幕は壯厳に引かれるのである。

☆ ☆ ☆

一九八三年六月、第一刷刊行と同時に世評を賑わし、社会的に評価の高い賞の対象にもなったこの一冊の書物をめぐって、いまさらめいた言挙げをすることには、少

ながらぬためらいがある。しかし、「子ども」および、彼らと「共に生きること」の意味、そしてその栄光と悲惨を、こんなにまで美しく、かつ重く、歌い上げた作品の数はさほど多くはない。子どもの傍に身を置く者の立場から、いま一度、改めてみつめ直しておくことは、必ずしも無駄とのみは言い難いと思う。

著者である大江健三郎が、現実にも障害を持った長男を抱え、作品のあれこれが、この子息との深いかかわりの中から生み出されたものであることは、よく知られたところであろう。しかも、彼は、学生作家などと呼ばれたそもそもその最初から、子どもと縁の深いもの書きであった。たとえば、彼の初期の代表作『芽むしり仔撃ち』あるいは『飼育』など、いずれも少年の群れを主人公としていて、彼らに特有の神話的宇宙感覚に支えられた世界が、大江流の文体によつていきいきと再現されたものであった。戦禍の中で見捨てられ、孤立した少年の群れ、恰かも捨子集団のような彼らは、しかし、不思議な明るさと強さに満ちて、たくましく世界を体験する。高

橋英夫がその『大江健三郎論』において、「社会秩序からはみ出した劣性部分やアウトサイダーが、そうであるために却つて社会を逆転する力を帯びるといった衝撃がそこに生まれる」と、讃歎した所以である。

これらの作品において、少年は、単なる素材ではなかつた。川本三郎の評言を借りるなら、「大江は他者として弱者を描いているのではない。自己＝弱者を描いているだけなのだ。誤解を恐れずにいえば大江は、自身、ひとりの大きな幼児なのである。」「大江の作品はどんなに理知的で、どんなに最新の知の意匠をおびていようが、それらの理性は、幼児のコスモロジカルな感覚、身体感覚によって最終的には乗り越えられる。リアリズムのいじましい法則の彼方に、神話的と呼んでいい豊かな空間がひろがつてくる」のだ。彼は、自身の筆で作り出した子どもらと一体化し、彼らの痛みを、彼らと同じ肉体の痛みとして感じ、彼らの喜びに全身を熱くする。大江作品の力は、この作者自身の幼児的感覚に基因するものであり、その感覚によってキャッチされた宇宙的親和力に

由来すると言えよう。

そして、大江のこの感覚は、脳に障害を持つ息子と父の共生を語る作品において、まさにその真骨頂を發揮する。作品世界の父と息子が、お互いがお互いの分身であり、恰かも一対の双生児のようにすら見えるのは、その何よりの証である。

社会の片隅に追いやられ、役にも立たない厄介者として、息を殺して生きしていく未来しか与えられていない障害児……。このアウトサイダーたる彼らの痛みは、大江自身の肉体と魂の痛みであり、それに形を与えるべく彼の言語表現力はフル回転して作品世界を紡ぎ上げる。しかも、紡ぎ出される言葉の一つ一つが、すべて、この「常ならぬ者」である息子の存在に逆照射されて、深い色合いに染められていくのだ。

一例を引こう。父は、この息子のために、この世界の

なにもかもについて、「定義集」を作つてやりたいと考えている。父の死後、息子が生の道に踏み迷うことのないよう、世界、社会、人間についての完備した手引き

を、息子やその友人たちにもよく理解し得る言葉で書きつけておいてやらねばならない。このことは、実は、息子のためというよりも、ほかならぬ父親自身を洗い直しがつ、励ますための嘗為であつた。大江の文章は、この経緯を次のように語つて見せる。「僕はかつてひとつ夢想をいだいた。それを文章に書きもした。僕が死ぬ日、経験として僕のうちに蓄積されたところのすべてが、息子の無垢の心に向けて流れこむ。もしその夢想が実現することができれば、息子はすでにひとつかみの骨と灰になつた父親を地中に埋めた後、これから僕の書く定義集を読んでゆくだろう。むしろそのような、もとより子供じみた夢想にすがりつくようにして、自分の死後の現在における息子の受難についての、様ざまな思いから救助されることをもとめて、僕はこの定義集を書きはじめるかもしれないが……」

父は、先ず、憲法を出发点に置く定義集を作ろうと意図する。第二次大戦後の変動期に少年であった父親にとって、新しい憲法の出現は、めくるめく感動の体験であ

つた。あの少年時の昂揚を、この知力の発現を奪われた息子と共有するすべはないのか。こうした父親の切ない願望に対し、息子が確実に受けとった定義、それは、父親の「足」に関するものであった。彼は父の足を偏愛し、柔かな壊れものでもあるかのようにそれを撫でさすりながら、「善い足、善い足、本当に立派な足ですねえ」とつぶやく。そして、外国旅行から帰った父との関係の回復も、この「善い足」の確認を通路としてなされたのであった。

人間の肉体の中で最も中心部から遠い足、それに触れるなどを媒介に、足の持ち主を理解しようとする息子の世界把握を、父は苦しみながら己れのものとしていく。

「しかし僕はよくイーヨー（注、息子のあだ名）の心の働きをも見てとりえていたのだつたか？つまりはかれの心の働きの側に立つての定義でもありえていたか？」
と、己れに問い合わせながら……。

このとき、ブレイクの予言詩『ミルトン』の一節が、

一閃の啓示として彼に与えられる。すなわち、ミルトン

の靈は流星のように降つてブレイクに入る、しかも、その靈はブレイクの足骨から入りこんで核心にいたつたのだ。こうして、ミルトンの靈とブレイクの肉体が合体したとするなら、父親の足に対する息子の偏愛、そしてそれを経路とする両者のつながりの意味を、改めて把え返すべきではないか。「僕はこれまでイーヨーのために、事物や人間について定義することをめざしてきたが、いまは逆にイーヨーがブレイクの『ミルトン』の一節を、はつきりしたヴィジョンとして提示している。これは父親のためのイーヨーによる定義」に他ならないのだ。

☆ ☆ ☆

——「雨の木」のなかへ、「雨の木」をとおりぬけて、
雨の木の彼方へ。すでにひとつに合体したものであ
りながら、個としてもつとも自由であるわれわれが、
帰還する……

父親は、インドネシアのボゴール植物園を訪れて、

「雨の木」と呼ばれる名木を遠望したとき、何故か直視することを避けて踵を返したのだが、その旅の途上で、右の一篇の詩のようなものを書きとどめていた。莢状の葉の中に水滴を含みこんで、雨の上った翌日まで、その茂みから滴をしたたらせる「雨の木」。母性ながらの潤いとやさしさに満ちたその大樹の下で、父は、自分一人だけでそれを仰いではならないという、激しい想いに把えられたのだった。「雨の木」とそれに象徴される安らぎの世界へは、息子と共に歩み入ろう。

そして、彼は、ブレイクが最後の予言詩『ジエルサレム』に、自身でつけた彩飾版画を見ていくうち、そこに描き出された「生命の樹」と「雨の木」との不思議なまでの類似に魂をふるわせる。しかも、「生命の樹」に磔にされたイエスと若いアルビオンとの対話は、彼の上に静かな恩寵として降り注ぎ、よくわからぬながら、イエスの思想の核心をなす「罪のゆるし」へと歩を進めるよう、彼を励ましてくれたのであつた。

息子は理性の力に恵まれず、現実世界には何ほどの貢

献もなし得ないながら、魂の力だけはむしばまれることなく、その無垢を持ちこたえているではないか。そんな彼と一体化しつつ、「生命の樹」へと歩み寄る。この生と死の過程が、無意味であるなどと誰に言い得よう。生産性という現実の価値の外に位置する息子との共生によって、父は、「罪のゆるし」「魂の自由」という別の次元の価値に導かれ、それが息子らと共有可能であるという確信によつて、再生の希望の中に老いを迎えるようとしている。

父は、ブレイクの詩句を借りて、「眼ざめよ、おお、新時代の若者らよ！」と呼びかけつつ、一つの幻を見ている。新しい時代、しかも、決してバラ色とは言い難い凶々しい核の時代に、凜然と額を上げて立つ息子らの健気な姿を……。このとき、私どももまた、この父のまなざしを借りつつ、暗い絶望の時代に、一条の希望を見ることになるのである。

座談会

日本に於ける女子スポーツの夜明け

—日本の女子陸上界硬式テニス界を中心に—

出席者 平野久子（旧姓・梶川）

福田富美子（旧姓・田村）

聞き手 村田修子

興水はる海

ずっと以前から、「是非実現したい」と思っていることがありました。私事で恐縮ですが体育の島、特に陸上競技をしていた関係もあって、NHKの「ヨーイ・ドン」でとり上げられた人見絹枝さん以前の、日本の女子の陸上競技の発生の時期に活躍をなさった方が大変身近におられるごことを知つておりましたので、この世界のためにも、どうしても当時のお話しを伺つておきたかったのです。

しかもその方々は、現在空前のブームをよんでいるテニス界におきましても草分け的な存在で大変有名でいらっしゃるので、これ等のことを知ることは、多くの方々にとりましても、意義のあることと思われます。

その上、お話し下さいましたお二人は、お茶の水の幼稚園を経て女学校にいらっしゃつて活躍をなさった方々ですので、当時の幼稚園の様子などについても伺うことができました。そのお二人のプロフィルを御紹介します。

福田（田村）富美子様と平野（梶川）久子様は共に現在東京にお住いでいらっしゃいます。「ああその方々は、田村・梶川組といって、ペアを組んでテニスで活躍された方々でしょう」といわれるようだに、多くの方が御存知でいらっしゃいます。

ます。

おふた方とも、じきに八十歳に手が届きそうなお年でいらっしゃるにもかかわらず、大変若々しく、お元気で今なおいろいろの面で御活躍なさっています。この対談の一週間あとに、福田様は庭球の試合の応援にスイスへお出掛けになられたほどの御活躍です。

なお、この対談には編集員のほかに、学生のとき、ささや

かながら女子高等師範学校に陸上部を私と共に作り、一緒に練習をしていた、現お茶の水女子大学の教育学部舞踊教育学科で体育史（特に女性の）を御研究していらっしゃる榎本はる海先生に御参加頂き、専門的な見地からお話しを進めて頂きました。

ただお詫びしなければならないのは、対談中、お写真を見たりしながら話しゃっていたために総てをお二人の旧姓で進めてしましました。そのことを途中で気がついたのですが、そのほうがよりよく当時のふん閑氣が出るのではないかしら、という思惑で、そのままにさせて頂いてしまいました。どうぞお許し下さいませ。

（村田 記）

村田 今日この様にお目に掛ることができて、こんなにうれしいことはございません。前々から是非お話しを伺わせて頂きたいと思っておりましたことなので、どうぞよろしくお願ひ致します。また、当時の幼稚園のことなどもお話し頂ければ幸でござります。

先ず当時としては、スポーツをすることは特別のことだつたように思われますけど、どういうことが一番思ひ出されることでござりますか？

田村 次第にいろいろなスポーツがやられるようになりますが、お茶の水ではまだリレーレースをやっていませんでしたので、「他の学校は運動会にリレーレースを採用していらっしゃるのに、なぜ、お茶の水は採用して下さらないんですか。」って臨教をお出になつて、初めて私達のほうへ体操を教えにいらしていた、田中せき先生に申し上げて、教員会議で先生方に計つて頂き、それで、やつと初めて、リレーレースが運動会に加えられたんです。そしたら、三年生は暴れん坊だから、専攻科三年の袴をはいている組と組まされました。チームを四組作りまして、それで、リレーレースをやろうっていうことになりました、私がラストで、私が走る時は、――お

茶の水の女学校の校庭っていうのは小さいので、コーナーが多いんですね——それで、初めのコーナーでひとり抜いて、次のコーナーでひとり抜いて、そして、一等になつちゃったんです。私達の組が。それで、もう、うれしくって、皆で写した写真があるんです。

村田 ああ、そうでござりますか。女学校の時に。

梶川ええ、これは、女学校の時に、初めて、お茶の水がリレー・レースを採用なさつて私達のクラスが勝ちました時の写真です。

田村 こうしていろいろな写真を見ていきますと、歴史とか何とか言うことじやなくて、起源が、こういうふうにして成り立つたということは、やっぱり残さなければならぬと思います。

「ヨーヨードン」以前の話

村田 私どもに、よくわかりませんのでお聞きしたいと思つておりますことがあるのですが、庭球界で大変お名前が有名でいらっしゃいますね。私も運動のほうの出で、やっぱり府立第一高女で陸上競技をしておりました。そのときは寺尾さん姉妹たちの時代に次いで二番目

に盛んな時でござります。私どもの時に、全国制覇をいたしました。その陸上の集りの時に、斎藤しづゑさんでおっしゃいますが、やはり、お茶の水高女の時に陸上をしていた、とおっしゃるので、お茶の水高女も陸上競技が盛んであった、ということは少しは伺つておりますけれども、このあたりのお話しを伺いたいと思って。本当に、これは、長年、そう思つておりましたんですね。それで、この間、ちょうど小学校の運動会の時に田村様にお目にかかるものですから、ちょっと、お願ひいたしましてね。それで、今、この持つてきて頂いた御本見せていただきておりましたら、ここにいらっしゃる平井さん、この方が、「女子は女子だけで会を持つたらいいんじゃないかな」ということで、その平井さんが、「女子陸友会」のお世話を下さったのです。その会の写真を、今、偶然見つけまして、大変なつかしく思つておりました。その会がずっと続いておりまして、田島直人さんの奥様の、土倉麻さん、ロサンゼルスのオリンピックへ行つた方とか、御子柴さん、浅野さん、永田さん、それから、織田幹雄さんの奥様、その他、陸上競技をしての方々の会合で、秩父宮妃殿下も御出席下さいま

す。

梶川 陸上競技の織田さんは、今でも、OB会のほうでお目にかかっています。

村田 そうでございますか。私共ですと、そういう会の時は、陸上競技関係だけのお話なのですけれども、テニスのほうでも有名でいらっしゃいまして、そこいらが、私共の感覚と、ちょっと違うんでございます。そのへんをお聞かせ下さいませ。

梶川 ああ、そう。こちら田村様は、駆けるのがお速いんですね。それで、初めはテニスね。陸上はなかつたんですけど、運動会のランニングは、いつも一等とつてらしたんです、テニスは、あの頃は、軟球でございます。そして、私が、前衛なんでございますの。それで、田村様が後衛で、私が「頼む。」って言うと、こっちの端から、あっちの端まで、お駆けになるの、それが、間に合うんですよ、速いからね。実に、頼もしいんです。こっちは、もう、バーンをやるだけなんですが、頭越していくのは、「頼む。」って言いますと、こっちに居ましても、こっちの端まで届いたらやうんです。ですから、足の速いことは、すぐ後衛にはいいんで

ございますね。硬球になつても、いいですね、前にも駆けられるし。だいたい、足の速いかたが、お上手なんじやないんでございましょうかね。テニスじゃなくて、「足ニス」だなんて言わされました。

田村 それで、学校は、テニスにしても陸上にしても、ひとつも、奨励はなさらない。私達が極東大会に行くのも、黙認。あの時は、私は卒業してたけど、黙認なんです。

梶川 ふだんの練習でもね、ちょっと時間が遅れると、先生が、ちゃんと時計もって、「早く、お帰んなさい。」って、やかましかったんです。

田村 「一時間の期限以上に練習した。」なんて、祝勝会に、先生に怒られました。

梶川 他校との試合なんて、全然なかつたんです。

田村 そりやあ、始まりは、東京都下に庭球大会つてものがございませんので、府立第二のほうに、金栗四三先生がいらっしゃって、それで、府立第二の方たちをつれて、お茶の水にいらして、テニスをしたり、バスケットをしたりして、お互に遊びまして、こちらからも向こうへ行つて遊ぶつてふうなことをしておりますうち

に、時事新報の森重さんって方が、「大阪でも女学生の庭球大会があるんだから、東京でもやりましょう。」って言つて、時事が提言して始まりました。

梶川 大阪のほうが、何でも先だったのね。これにも書いてあるけど。

田村 テニスが始まってから、陸上のほうも始まりまして、YWCAだったかしら、青年会か何かが主催で、お茶の水のグラウンドで、女子のが始まつたんです。その時は、私達、テニスだけでした、大正十一年の秋に、全日本女子陸上競技っていうのが、初めてできまして、それで、戸山学校のグラウンドであるって時に、私も出ました。お茶の水は、普段の訓練つてことをよくして下さつてますから、初めて出たんでございますけれども、私も、百米と五十米と四百米リレー、三百米リレー、その予選・決勝みんな一等とつちやいまして。朝から夕方まで駆けづめで、お昼はサンドウィッチふた切れくらいしか、食べる暇がないんです。それだけしましても、翌日、平気で学校へ行かれたんですね。ひとつも、くたびれたりっていう感じなしに、行かれたんでございますけれども、まず、先生に叱られました。「あなたは、昨日、

靴下を脱いだそです。女の子がそんなことではいけません。もっと慎ましやかにしなさい。」って。何も、お詫びの言葉、ないんです。

村田 その時の主事先生はどなたでいらっしゃいましたか。校長先生と申し上げるんでしょうか。

田村 極東大会の時は、藤井先生が主事だったのよね。

梶川 私達は、それで、極東大会も、「默認しますから、行ってきなさい。」つてことで、藤井先生がそうおっしゃいまして、それで行きました。

村田 ああ、そうですか。

田村 ですから、何て言うんでしようか、学校は、やつぱり、評判がどうなるかってことを恐れてらしたんですね。「全国の模範になるべき学校があんなことをした。」つて言われちゃ大変だと思つてらしたんですね。だけど、私など、母に早く亡くなられまして、ひとり娘だったのですから、祖父も父も医者で、祖父は学校時代に、朝五時頃出かけて、吾妻橋のけいこ場でボート漕いだような特別暴れん坊だったもんですから。そして、また、イギリスがあんなに立派に暑い土地を統治している

のは、みんなスポーツで鍛えてるんで、スポーツは大事なんだ。ことに私なんか、「おけいこは、何もしなくていいから、体を鍛える。」って言うような、スポーツに理解のある曾祖母に育てられましたのですから、私が試合なんてなりますとね、先生おわかりになるか知らないけど、なた豆つて、ご存知かしら。

村田
はい。

田村　なた豆切りましたら、「一」っていう字になりますでしょ。で、朝のごはんの時、なた豆を古漬けにしてありますまして、それを切って出してくれる、「一位になれ。」って。そして、出る時は、昔は神棚に、このカチカチがござりますでしょ。玄関でカチカチやつて、「しっかりやっておいで。」って錢形みたいね。ですから、先生がいろいろおっしゃつても、そういうことは、あんまり耳に入らなくて、「いいことしてるんだ。」って思つて、私達はやつておりましたから。別に、それほど気にしなかつたんですけども。弱い方だったら、あんなふうにされたら、いやだつたらうと思ひます。

村田　陸上競技もなさいますし、テニスも、それから、他にも、いろいろとなさったのですか。

田村　スキーもまいりました。

梶川　何でもね。あの頃、運動があれば、何でもやりましたね。ボートまで漕ぎましたね。

田村　隅田川で、府立第二高女の人と、競争しました。

梶川　第二の方と、高等師範のボートを拝借してやつたものです。

村田　それで、お二人じやございませんでしょ。

梶川　あと、お茶の水からはテニスの仲間が五、六人おりまして、みんなちょうど、兄達が高等師範の附属におりますでしょ、そんな関係で、とても、お茶の水と高等師範つてのは仲が良かつたんでござりますよね。だもんですからね。よくボートを借りまして、漕いだものです。

田村　中学生ではなく、マラソンをしていらして、みんなが「ペペ、ペペ」と呼んでいた金栗四三先生、山岸徳平先生が、お若い頃ね、私達の監督みたいに、つれてつてくれました。

田村　ああ、そうですか。それで、ボートといいますと、今のボートレースのですか。

梶川 八人乗りのです。

村田 ああ、エイト。

梶川 すごいでしたよ。重たくって。

田村 オールがね、長く。もう、一番だか三番だか、

漕がされて。

梶川 もう、しまいになりますと、笑っても、おなかの皮が痛いんですね、あれ。あんまり伸ばすから、おなかの皮が、笑っても痛くて、私はつらかった。

田村 よくね。流しちゃえればいいのに、いつまでも、頑張ったりなんかするから。

梶川 やっぱり頑張っちゃうのねえ。でも、何でもいたしましたの。馬だけしなかつたかな。重たくて、かわいそ�で。

村田 ああ、そうでござりますか。それじゃ、別に、

今のように何の選手、ということではなく、いろいろなものをなさつたのですね。

梶川 今でも、ほとんど、私、お医者さんにかかりません。丈夫で。

村田 ああ、それはよろしいですね。

梶川 健康診断に、老人健診に行くだけでございま

す。おかげさまで、若い時に鍛えたってことは、やはり、いいことでござりますね。

田村 体は、お婆ちゃんになつても、気持ちだけは、お婆ちゃんにならないわね。

梶川 それで、割合に、逆境に立つても耐えられるっていう……。スポーツって随分つらいでございましょう。それ、がまんして、くいしばってやらなければやらないんですけどからね。試合なんていたら、自分がいくらくらいでも、学校のためなら、くいしばって出なきゃならない。そういう頑張りが非常に役に立つております。

村田 はあ、そうですね。私も、そう思いますけど。

梶川 確かにそうね。人の言うこともああいう人だなと思えば苦になりませんしね。

田村 スポーツはすべてですけど、ことにテニスのダブルスは、お互いに助け合う気持ちが、根本になければ、成り立ちません。その気持ちが、小さい時から培われているということは、いいことだと思いますね。

村田 そうですね。今、大変、テニスブームで。

田村 本当ですね。

梶川 今は、幸せですよ、みなさん。

田村 それもねえ、もう少し、気分的な面、精神的の面と体の面とに、身を入れて下さるといいのにね。

梶川 本当に、つらいのに耐えられないわね、今の方は。どっちかって言うと。

村田 そうでしようね。

梶川 もう、つらいことや、いやなことがあつたら、すぐ、やめちやうほうじやないのかしら。

田村 本当に、庭球のことや、いろいろとお話しを伺つてはおりましたんだけれど、この間、陸上の話を聞かせていただきましだの。私共から考えますと、私も府立第一の時、体育館のギャラリーに陸上競技部の記録、例えは橋本さんとか、勿論、寺尾さん姉妹の写真が飾つてありまして、ハイジヤンプでしたら1メートル11、日本新記録なんて書いたのが飾つてあつた……。こういう思い出があるんです。今の今まで私は、お茶の水の女学校で陸上競技が大変盛んであつたというのを、よく知らなかつたのですが。

田村 全然、先生がタッチしてらつしやらなかつたから、記録もお残しになりませんものね。

梶川 もう、学校が何もタッチしなかつたわね。たゞ体操の先生と、田中せき先生とが個人的にコーチして下さつたくらいね。「名前、出すな。」っておっしゃつたんですもの。「試合に出ても、お茶の水つてのを出さないで、個人的に出ろ。」って、おっしゃるのね。

田村 それ式なんですから。学校が、記録をお残しにならないわけ。私達がやつてていること、いいことだと認めて下さつてなかつたんです。

梶川 だから、おそらく、どこにもわからなかつたんでしょうね。どこの学校でも、寺尾さんは、私達の、ちよつと後でしたけどね。

田村 ええ、寺尾さんが後で、寺尾さんと人見絹枝さん達が一緒にございました。私達、一番最初。

梶川 御子柴さんが同時頃かしら。

田村 御子柴さんは、全日本にも、お出になつたんですけど、その前になさつたので有名なんです。

梶川 その前つて？

村田 水泳をしてらつしやいましたね。

田村 飛込みもなさいましたしね。

梶川 あの方、運動家だった。

村田 御子柴さんのために、お父様がつくったという

ますけれども、

プールが、今の深大寺のほうにございましたして、そこへ、くしくも、府立第一高女の運動場ができまして。今で

は、池になっていて、もう泳げないものでしたけれども、まわりが木で、五十メートルございました。その

頃、私は女子陸友会で、御子柴さんと一緒することがありましたんで、「御子柴さんの泳いだプールが、あそこにありますよ」と申しますと、「そうなの。あれ、父が練習に作ってくれたの」って言つてらつしやいましたけど。その時代は、やはり、いろいろな運動をなさつてらしたわけですね、みなさん。

梶川 そうでござりますね。やつてはいたんですけど、テニスだけですよね、試合に出たのは、大正十二年に。

田村 これが、その戸山学校の時の写真です。

村田 でも、こういうの、よくとつておかされましたね。

田村 親戚の者が、とつて、しまつておいてくれましたので、私の里にはございませんでしたし、また、私が持ってきてたら、焼けてしまっているわけなんござい

ますけれども、そうでござりますか。本当によかつたですね。

編集部 これが当時、絵ハガキになつていたのです

ね。

梶川 プロマイドで売つてたのね。

田村 そうなの。

梶川 それね、試合の最中に大阪で、もう、どんどん売つてましてね。私の、こんな足上げたのがあるでしょ。それ全部、絵ハガキだつたんです。「私、いやだわ。みつともなくて」って言つたら、買い占めて下さつたの。こんなにありましたよ。

田村 極東大会の時なんか、コートの下の方に、幕なんかございませんから、応援したり、見て下さる方たち、ずっと下の方に座つてているわけでしょ。そういう人たちが、みんな、大阪はとても弥次が多くてね、「えーぞ、えーぞ」って、大きな声、出さんですよ。その時、いやだつたわねえ。

梶川 今は、こう、下の方は幕があつて、球も見いいですけどね。

村田 今のスター並みでしたのに。この時は、軟式ですか、硬式ですか。

梶川 極東大会ですから、硬式です。でも、軟式から変わったばかりですかね。

梶川 でも、大して違わないですね。今のボルグでも何でも、見てみると、軟式みたいね、やり方。

村田 そうですね。

梶川 だから、あれ、あの通りに、ほら、福田さんのご主人（庭球界の大御所）たちは、硬式は、何とか式って言って、違つてらしたけどね。「上の方からバーンとやれ」とか何とか言って。今の外国の選手は、ドライブかけてますよ。軟式やつてれば、硬式もできると思うんです。それで、中国の人たちが、「なんで、日本人は、あんなにうまいんだろう」って言いましたよ。あっちは、急に硬式に変わってきたでしょ。こつちは、軟式やつてから硬式に入っているから、まあ、試合も慣れてるし、試合運びもうまかったです。

田村 そうね、0—1くらい。

梶川 2セットしても、1点くらいしか入つてないんですよ。ですから、「日本人で、どうして、あんなた

ニスがうまいのかしら。」って言われましたからね、「昔から、軟球つるものがあつて、軟式をやつてたから、できるんだ。」って、誰か説明したようでしたけどね。ただ、打ち方が、ちょっと、トップで打つのと、あれが違うけど。

村田 初めに、軟式みたいにやると、すっとんでいつてしまいますが、とぶということだけわかれば、できるのかも知れませんね。それで、軟庭っていうのは、一休、いつ頃からでしたんでしょうか。

田村 私の母もやつてましたよから、それはもう、前からだと思います。

梶川 私達が生まれる前ぐらいから、あつたんじやないでしようかね。よく、袴でかくして、テニスやつてたなんて、お婆ちゃん方、言つてらしたから、随分前からあつたんじゃないですか。

田村 お茶の水でも、やつてたよね。

村田 でも、私達が学生の時に「こんちやん、こんちやん。」って呼んでた、家事的理科つてのを教えてらした、大学の近藤耕造先生が、テニスの発展に力を尽されたということは思いもよりませんでしたし、初めて伺っ

たことでござります。

〔輿水先生がいらっしゃる〕

村田 今、こちらの大学の体育のほうにいらっしゃいます、輿水さんとおっしゃいまして、上田俊ちゃんも知つてらっしゃいます。

輿水 これは、当時のものですか？ 素敵なものを持ち下さつて。楽しみです。

村田 ええ、そうなんです。今、それを見せて頂いておりました。

輿水 歴史的な方々に、お目にかかるて……。だつて、一番大事な時期を開いて下さつた方たちで、もう、うれしくつて、ゆうべから、わくわくしております。梶川 歴史上の人物になつちゃつて。

輿水 いえ、本当に、女性の一番草分けでいらっしゃいますしねえ。

梶川 そうなの。私が明治三十八年生まれでしょ、生まれが。こちらは早生まれで三十九年なんですね。ですから、もう七八八。歴史上になつちゃいましたね。

輿水 七十八。お若いわね。

梶川 これも、スポーツのおかげです。

輿水 そうですか。十引いても、まだ、十五くらい引かなくちや。素敵ですね、あこがれちやいます。

日本のはいからなユニフォーム

輿水 これ御存知でしたか。これは、二階堂とくよ先生がイギリスから持つて帰られて運動する時、この学生に着せたチュニックなんです。

村田 ここ的学生にも着せたんですけど？

輿水 ええ、それから、東京女子大学も、奈良も。もう、お茶の水から日本全国にこれが広がつてゐるんです。

村田 ああ、そうですか。

梶川 それで、私達の着てるのも、何か、そういうふうな形のものなんです。

輿水 こうしてみますと、服装が、外国と比較して、モダンなんですね。

田村 梶川さんのお姉様が作つて下さつたのです。

輿水 向こうのものを参考になさいまして？

梶川 カタログは、やっぱり、こっちにはないから。向こうのものだつたんでしょうね。

輿水 だから、モダンなんですね。あら、いい写真、

楽しい。

田村 それで、作っていただきましてね、そのユニフォームをして、三越なんかへ買い物に行きました時に、「今日はユニフォーム持つてらっしゃいますか。」

つて向こうで言うんですね。「持つてますけど。」つて言つたら、「こちらへいらして下さい。」なんて、貴賓室に通されちゃつて、「どうか拝見させて下さい。」と言われたりなんかしました。そして、それからあとが、おもしろいんですよ。普通のシャツだの、何か売っている店がござりますでしょ。そういう洋品屋さんの店先に、「田村・梶川式ユニフォーム」つて、ぶらさがつて。おかしいですね、ぶらさがつてたんですよ。

梶川 そしたら、みんな、テニスの時に、ここに黒いボタンが付いたのが、はやつちやつて。

田村 それで、ボタンが、そのパターンにあつたんですね。「ボタンはおかしいから、やめたらどうかしら。」

なんて言う人もいましたが、そしたら、「ボタン、付いてたほうが、おもしろいわよ。」なんて、反対いう人もあって。ボタンの付いたままで私達が着ておりますでしょ。

奥水 ああ、これでござりますね。

田村 富士絹の白で作りまして、装飾のボタンが七つ位ついています。

編集部 このヘアーバンドは、どうなさつたのですか？

梶川 あのね、やっぱり、絹で、汗をよくとるために当てたのです。

村田 今のと全く同じなのでびっくりしますね。

編集部 今も、こうやりますね。

梶川 そうなのね、ボルグなんて、やつてるでしょう。神戸のハイカラな所に売つてたんです。それで、水玉模様の、幅の広いのもございましたし、こんな細いのもございました。

田村 水玉じやないのよ。バラの花か何か。

梶川 バラの花。でも、ちょっと、水玉に見える……。このくらい幅の広いのね。

田村 新聞なんかに豆絞りなんて書かれたんじゃないの。

梶川 でもね、ここいらへんで、ちゃんと結んで、垂れたりのね。今、考えたら、今の人みんなやつてますで

しょ、ボルグでも何でも。だから、やっぱり先端だった。また、戻ってきたんじゃない、流行だから。汗をとるためには。中国、昔は支那人ね、その人たちは、こういうブルマーをはいていました。

奥水 これは何年頃ですか。

梶川 大正十二年の、大震災の前です。

奥水 そうすると人見さんより、一年位前ですね。だから私、そこがね、今はもう、人見さん 最頂点で、一番スタートみたいに、世の中では考へてるけれども、もつと、その前でいらっしゃったのですね。

梶川 私達、先なんですよ。

奥水 私、ゆうべ、いろんな資料、一生懸命勉強してて、そうだと思つていました。

田村 でも、私達のことだけは出してないわけなの。学校が……、だって、靴下脱いでバイクはいたら叱られたのですから。

奥水 これから出しましようよ、世の中に。人見さんは、お出になつたのが大正十三年ですね。

梶川 私達は、テニスは十年からやつて、いや、ランニングでも、そのくらいからやつてたんじゃない?

奥水 ああ、素敵ですね。この新聞、何新聞で、いつかってこと、わかりますか。ああ、時事ですね。

田村 時事の、ここ、大正十一年五月二十九日、日曜日となっています。

極東大会

村田 極東大会のことを少し聞かせて下さい。極東大会なんかに出るっていうのは、やっぱり、人数の制限なんかあつたと思うんですけど、如何ですか。

梶川 極東大会に出る場合は、まず、予選があつたんですね。

田村 予選的に、オール関東なんてのが、ございましてね。

梶川 オール関東があつて、オールジャパンがあつて、それで、全部勝つた者が出たんです。それで、今度の第六極東大会には、女子のもやるから、勝つた者が出て下さつてことになつて、出たのよね。

田村ええ、それで、大正十一年は、軟式で出たんですけれども、大正十二年に、極東大会があるので、十二年の春は、もう、硬球で出なくちゃならなくなりまし

て、急に、硬式に変わつて。それで、何しろ、昔は、霜解けでございましょ、だから、三月終わりで、霜解けが終わらなきや、テニスができないんですよね。

奥水 そうですね。

田村 霜解けが終わつてから、硬式に変えて四月始めの試合に。初めに、オールジャパンがあつたんです。

奥水 それは、大正十二年?

梶川 十二年の四月ね。硬球になつてからですから。
奥水 今、女性の体育史の中でも、その頃の、予選があつたとか、そういう話は、全然出てないです。今、初めて伺いました。大変にニュースです。

田村 それで、第二回となつておりますけど、第一回は、秋の軟式の大会の時に、硬式の人が、四、五人しかいないのね、それで、第一回は、それだけの方が、私達が軟式の時に、その場でいっしょに、硬式の第一回があつたわけですね。

梶川 あの時は、柳谷さんだの、安場さん、田さんがお勝ちになつたわね。

田村 当時は羽仁節子さんは、軽井沢にいらしたものですから、硬式やってらしたんです。だから、私達の先

輩なんですね。

梶川 羽仁さんは一番先でしちゃうね。

梶川 びっくり。

田村 これが、ですから、まず、関東での予選になりまして、それから、関西とやりましたんです。そして、この時、ストレーラーてのはうまいんですけど、何しろ、私達は、軟式から急に変わつたばかりですから、まだ、球は、たぶん、ふわんとした球だったと思いますから、相手は打ちにくかったと思ひます。はつきり言って、当てることが、まだわからなかつた時代ですから。

梶川 ドライブがかかつたからね。

田村 ええ、変な球で。

奥水 いわゆる、今の、スピンドルです。今、一番流行じやありませんか。

梶川 ええ、そうそう。

田村 その上、何でも走つてとればいいんでしょうつて主義でしょ。前の年にランニングやっておりますから。だから、どんなのでも、駆け出していって、とつちやいますし、高けりや、とびつけばいいんでしょつて。

相手にしては、プリミティブのところへやつちやつたわけで、相手は、びっくりしちゃつたんでしょ、きっと。

梶川 それでも、オリンピックの時は、三井さんがつれてって下さつて。

田村 習つちやつたのね。

梶川 ボレーのやり方ね、みんな教えて下さつた、外國のを教えて下さつたんです。

奥木 大変なものですね。これが、そのメンバー?

梶川 メンバーです。私達、コーチが良かったのね。

熊谷さんだとか、鳥羽さんだとか、安部さんとか偉い方ばかりが教えて下さいました。

田村 鉢巻きしてて、これも、私達の後輩の人のお姉様が、神戸にいらしたものですから、その人が、それを買って下さつて、私達のところに。この人が、その、背の高い人です。これが羽仁節子さん。これ、アッシャーつて方。

奥木 ああ、そうですか。

田村 三井さんのお宅の家庭教師で。イギリス人か何かのお婆さん。

梶川 アッシャーさんね。

村田 これは、大変なことを、いろいろ伺いました。

奥木 うれしいですわ、私、本当に幸せ。

田村 本当にね、歴史的なことでござります。もう、六十何年前のことですね。一九二三年ですからね。

梶川 大正十二年ですよね。

奥木 ずいぶん、昔。

奥木 でも、よくぞ、これだけとつておいて。

村田 本当にねえ。また後でっていうの、なかなか、その人でも不可能ですものね。極東大会は、テニスもあつたんですね。

田村 その年から、あつたんです。

村田 それは、特別なんですね。

田村 オープン競技としてあつて。

梶川 陸上競技も女子もあつたんでしょ。

田村 あつたんですよ。

梶川 あなた、出なかつた?

田村 あつたには、あつたんでしょうと思ひますけどね。

梶川 あの時は、どなた出たの? 御子柴さん?

奥木 女性はどうだったのですか。

田村 オープンだつたかな。

梶川 なかつたかもしれないわ。

奥水 ほとんど男性中心で。

梶川 だつて、テニスですら、オープンで迎えられた状態でしたからね。

幼稚園のこと

村田 話は変りますけれど、御兄弟方がみなお茶の水

の幼稚園と伺いましたが、当時の先生方はどなたでいらっしゃいましたか。

(お二人で卒業時の写真を見ながら)

お二人 目白に幼稚園を作られた和田先生、倉橋先生、安井先生、池田先生、井村先生、坂内先用、雨森先生、これ明治四十五年ね。

村田 その頃の幼稚園のことは、よく覚えておいでになりますか。

梶川 やつぱり、幼稚園と小学校ね、一番懐しいのは。

田村 お池があつて、築山があつて。

梶川 今の運動場が似てるんですね、前のとおり、築山があつて、砂場があつて、割合に、やつぱり、昔のと

おり。

村田 そうでござりますか。藤棚も覚えていらっしゃいますか？

梶川 ええ、藤棚は、小学校寄りのところに大きなのがあって、卒業してからそこに集まつたことがありました。

村田 幼稚園の時、おもしろかったとか、何か印象に残っていることござりますか。どんなお歌をうたわれたのでしょうか。

梶川 今も、随分ありますね、その頃の歌が。

村田 どんな歌ですか、歌つて下さい。

梶川 ええとね、「むすんで……」だつてそうでしょ。それからね、あれは何ですか、「今日のけいこもすみました」つての。

村田 今でも歌つているところ、ありますね。

奥水 もう、そんなモダンな歌、歌つてらしたんですか。

梶川 ええ、そうなんですよ。

村田 明治四十四年ですね。

梶川 それから、あと、何でしたつけ。七夕のうたなんか。私の知ってるのを、孫が歌つていると、とても、

うれしゅうござりますよ。「あら、まだ、その歌あるの。」つて言つたものです。

奥木 一番モダンな歌をうたつてた時期でしょ、ここがね。

梶川 よく、ままごとやつてたわね。砂遊びとか。

田村 山を駆けおりたり。

村田 ああ、そうですか。

梶川 ちゃんと、今こちらにあるのとよく似てる山があるんですよね。私は、時々孫を迎えて来たりしておりましたものですから、「お庭ながめると、あら、昔と似てるわ。」なんて懐しく思つていました。

田村 遊動円木もありましたね、藤棚の方に。

村田 ここに堀七蔵先生がアメリカで見ていらして作らせた、当時のジャングルジムが二つございますのよね。

今、ながめてみると、間が狭いんですね。やっぱり、それだけの体格の違つていうのかしら。

梶川 ああ、そうですか。

田村 お話をうけど、及川先生が、教生の先生で、私達小学校三年くらいの時、教えていただいたのね、及川先生ってね。

梶川 及川先生、この間までいらっしゃった感じですけれどね。

田村 私の母が幼稚園におりました頃に、皇后様がいらっしゃて、そのおみやげだつていうので、折本の、御伽斬の、木版のきれいな本が里にございましたけどね。

編集部 桃太郎じゃないですか。

田村 何か、木版の御伽斬の本で、割に、こう厚く折本になつて、きれいなものでしたけどね。「皇后様のおみやげなのよ。」なんて。

奥木 お母様も、幼稚園でらして。

田村 幼稚園の時。

梶川 もう、お母様、生きてらしたら九十いくつですものね。

田村 今、その母を知つててらっしゃる、九十四歳のお婆ちゃんが、作業会に、お習字のほうにいらっしゃるんですよ。

梶川 幼稚園は本当に楽しかつたけれど、「何が」と考へると、よくは分らないわね。時がたつた、つてこと

ね。

小学校

奥水 田中せき先生だつてそうですね。それから、二階堂先生。二階堂先生だつてピカ一の外国帰りの先生ですね。

奥水 やつぱり、小学校でもそだつたんですね。小学校の教育も、割合と大らかで、お受けになつた?

梶川 敵しいってこともないでしょ。

田村 そんなに敵しくないけれど、でも。

奥水 お遊戯や何か、どうだつたんでしょう。やつぱり、小学校や何かの教育も残つてなければ、そんなに素晴らしい、高等女学校で活躍されなかつたでしょ。

梶川 それはそだつたんですね。やつぱり、お茶の水の基本をしつかりとなさつた良さではないかしら。

田村 男の先生がいらして。

奥水 藤山快隆先生がいらして?

梶川 藤山先生がいらしてから。

田村 隨分、盛んになりましたね。

梶川 結局、体育の先生の、ご指導でござりますね、これ。

奥水 いい先生をお呼びになつて。やつぱり、日本を引っ張つていつた方たちがいらしたから。

梶川 そうです。ですから。

田村 文部省の留学生です。ああいう先生がやつてらしたから、その教えを受けた先生が、そのまた生徒の方がみんな先生におなりになつて、お残りになつたんだから、優秀だつた筈ね。

奥水 それに、家庭環境もよかつたでしょ。

梶川 ちょうど、何て言うんでしょか、大正時代で、割合に、自由主義って言うのか、時代も良かつたんですよ。

奥水 そだつたんですね、やつぱり、第一次世界大戦終了後の、いわゆる大正デモクラシーの時代ですね。

梶川 本当に時代が良かつたと思うんですの。何でもが恵まれたんじやないでしょ。

奥水 やつぱり、あの時代ってのは、もう一回、評価しないおさなきやいけない時代ですね。

梶川 そうですね。それでいてみんな、フワーッとしたような気持ちはないし、戦争後でしたから、みんなしつかりしたものを持ってたし、良かつたんですね。

奥水 それから、運動お続けになつたのは、その頃だけございますか。

田村 そうですね。

梶川 私、その後はゴルフしてました。

奥水 ゴルフを。あら、いつ頃から?

梶川 そうですね、戦後、私は結婚してから、満州、大連におりましたの、ずっと。ですから、運動は、テニスもやつたし、ゴルフもいたしておりまして。

奥水 あちらで?

梶川 はい。それで、第二次大戦後は、子供が大きくなりましたから、子供といっしょに、男の子なんかとゴルフしております。主人が目をわざらって、しなくなつてから、私も遠慮しちゃつて、いたしませんけど。

田村 彼女はホールインワンをなさつたの。

金員 あらー、そんでらつしやいますか。

村田 たくさん、いろいろなお話を伺つて、いる間に時間がきてしました。長時間ありがとうございました。奥水先生のほうは、すごくたくさん資料がございましたね。

奥水 私、もう、すこく太りました。うれしいです。

村田 ゼひ、その御本や写真を、また見せていただきまして、その時代の知られないことを世の中に出したいような気が致します。本当に長時間、貴重なお話をたくさん聞かせて頂きまして、有難うございました。

この対談は、御二人の熱意と、尽きることのない思い出に満ち、また初めて伺う者達の粘つこい質問に、延々四時間もの間続けられたが、まだまだという感じであった。長い記録の中から、これだけに纏めさせて頂いたことを御報告すると共に、福田様の御次男が、御うちに早稲田の庭球部の男性の方ばかりお見えになるので女の方に慣れていないし、赤いものが嫌いだったところ、幼稚園で赤組になり、それが気に入らないで、お遊戯なども見てばかりいたのに、緑組になつたらすぐ始めてしまった。という話とか、個性が強く、先生に手をかけて頂いた子の方が羈氣があつて、何でも一生懸命やつて面白い。というお話しや、平野様も御兄弟がたくさん在園していらしたので、お弁当を落したりすると、「姉のところへ行ってごはんを貰つたりした」という思い出話しが、当時の雰囲気をほうふつときせていて、それ等のお話しから、幼児の教育に参考となるいろいろなことをお教え頂くことができました。

(村田 記)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち ①



村石京子

「保育」という仕事に携わるようになり、幼稚園で毎日子どもたちと一緒に過ごすようになつてから、かなりの年月が経ちました。その年月の間によく感じたことであり、最近その思いが次第に強くなってきたことに、子どもたちにいろいろなことを教えてもらつているという思いがあります。

本来なら、子どもと教師という関係で見れば、子どもたちにとって私は指導者であつて物事を教えていく立場なのですが、実際には子どもに教わる場面が多く

あります。それは子ども同士の何げない会話の中にハッとする感じることもあり、友だち同士のはげましあいであつたり、子ども自身の持つ考える力や伸びてい力を見たときであつたりします。あるいはそのひたむきさであつたり、純粹であつたり、時には胸をつかれるような優しさであつたりすることもあります。また時には物事がうまく運ばず暗礁に乗り上げたような気分のときに、よい方向に助け舟を出してくれたり、新しい道を見つけてくれたりして問題解決の方法

を教えてくれることもあります。相手が幼児であっても、人と人との関係に於ては相手から教わることが何

とにしました。

と多いことでしょう。人間社会の関係は一方的に教える者、教わる者という関係で成り立つのではなく、お互に教えられたり教えたりという相互作用の関係でつくられ、前進しあっているのだと思います。

そのことに気づいてからは、もし私がいつも先に立つて子どもを指導してばかりいるならば、かえって子どもを曲げてしまうような思いさえしてきて、つとめて子どもの内なるものを引き出したい、伸びていく芽をつまないよう見守りながら必要に応じてサポートする、こんな立場をとる保育でありたいと思うようになりました。

長い年月も過ぎれば一瞬に凝縮され、一つずつの小さな出来事は消えていきますが、一つ一つの出来事は点であっても、積み重なり引き続ければ線となっていきます。保育の中で感じる思いが点から線に伸びていくことを願って、小さな事柄を少しずつひろっていくこ

●先生の名前は？

私の組に四才児で入園し、父親の仕事の都合でその年の六月から三月まで家族中で渡米し、五才児になつてもどつて来た女児（U子）がありました。園に再び通うようになった当初は、園での習慣とか友だち関係などの面が円滑にいくかしらと母親とともに随分心配したものでした。その環境の急激な変化を乗り切るために、本人の努力は随分大きなものがあつたと思います。さいわい気性の明るい子で表面にはあまりこだわりを見せる事もなく、五才児の級にもどつてきました。

ただ時折、五才児なら当然わかっていると思われる事柄が理解されず、U子自身もとまどつたり、こちらもいつもと異なった気づかいをしたものです。いろいろありました。その中でこんなことがありました。ある日のこと、遊んでいる途中でふと私の傍へ来て二

コニコしながら、「ねえ、先生の名前、H先生でしょ
う？」と言つたのです。問い合わせでしたが、それは尋
ねるというよりも自分の言つたことに承認を求める
といった感じの話し方でした。

子どもが自分の級の先生の名前を覚えると、ということ
は、自分の信頼をあずけるような大きな意味をもつて
います。五才児の級の他の子どもたちは、前の一年間
のつながりで担任の名前はよく知っていました。そば
で聞いていた子が呆れたといったように「へんなこと
言うわね、M先生のことH先生なんてへんなこと言う
のね」となじる口調で言いました。でも実は、U子の
兄が以前こちらの園に在園しており、H先生の級であ
つたので、時折家でも兄の担任の名前が聞かれていた
のでしょう。先生の名前といえばH先生というように
U子に印象に残っていて、それを確かめてみたような
様子でした。そうした事情を知っているので、たいし
したことではないのにその思いちがいを即座に訂正しが

たくて一瞬とまどつてしましました。

でもそのときすぐ傍にいたN子が「Uちゃん知らない
いのよ」と言い、続けてY子が「忘れたの、忘れたの
よ」とI子に向かつて言いました。そしてさりげなく、「M先生よ。」と言つたとき、U子はきまり悪そ
な顔ながらニコッと笑つたものでした。

自分たちの先生の名前を間違えるなんて呆れたとい
つた感情を「忘れたのよ」という相手の立場に立つて
かばつてくれたY子の心の動きに相手を思う優しさが
ありました。子ども同士で教えたり、かばつたりして
育つよさを、その頃私の心中でU子のことが比重を
占める割合が大きかつただけに、嬉しく心に残りました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

赤本「鼠の嫁入」にみる教育的位置と多様性

森 下 み さ 子

一、はじめに

従来、我国における絵本史は近代以降をとりあげ、諸

の絵本史では概観しにくかった我国における“絵本を媒介とした子どもへのかかわり”をとらえるためには、これら草双子の誕生・発展に目を向けることが必ずと思われる。

ただし、なかでも草双子の誕生期にあたる赤本は、その時代的古さもさることながら、子どものもてあそび物という特性にも災いされて残存する資料は乏しく、また文学的価値が低いと見なされ先行する研究も少ない。そこで、赤本の性格を探るにあたり、まずはその中から特長的なものとして「鼠の嫁入り」をとりあげ、ここに検

討を試みることにする。

「鼠の嫁入り」をとりあげる主な理由は、次の三点に負うて いる。

- ① 室町時代から江戸時代初期にかけて、鼠の登場する嫁入場面を扱った絵巻『鼠の草子』が存在し、赤本以前のものとの関係をみていく上で貴重な資料と考えられる。^{*2}なお、両者の関係については小池藤五郎・瀬田貞二の指摘、及び小谷成子による場面の構成・書き込みからみた比較分析があり、それぞれ貴重な示唆を与えてくれる。^{*3}
- ② 「鼠の嫁入り」というテーマは、次に記すように赤本胎生期の行成表紙本に書名が見られるのをはじめとして、黒本・青本・黄表紙にもあらわれており、江戸を通じて好まれたテーマとしても重要な位置を占めている。^{*4}
- ③ 江戸を通じて動物や化物などを擬人化して嫁入・婿入を表わした草双子がいくつか存在するが、中でも『鼠の嫁入り』は古い資料である行成表紙本に書名が残

『鼠よめ入』

『ねつみのゑんくみ』西村重信作

○黒本・青本

『鼠の嫁入り』黒本、鳥居清満画

『鼠嫁入雛形』黒・青本、富川吟雪画

『鼠嫁入蝙床』黒・青本、安永元年

○黄表紙

『鼠嫁入』安永七年

『鼠子婚禮塵劫記』曲亭馬琴著、歌川豊國画、寛政五年

『鼠嫁入』内新好著、樹下石上画、享保三年

また、式亭三馬の『浮世風呂』に「私どもの幼少な時分は、『鼠の嫁入り』やむかし咄の赤本が此上なしでございました。」とあり、赤本の中でも子女に好まれた中心的な題材と推測できる。

- 行成表紙本
『鼠の嫁入り』
○赤本

づてのこと、他の嫁入ものと比べて数もまさつていることから、これらの中心的資料と考えられる。次に

「鼠の嫁入」^{*5} の影響を受けていると考えられるものをあげておく。

『狼の嫁入』赤本、西村重長作

『隠れ里福神の嫁入』赤本

『鳥の嫁入』(仮題) 赤本、西村重長作

『鶴の嫁入』(仮題) 赤本、黒・青本、西村重長作

『化物よめ入』(仮題) 赤本、青本

『狐の姫いり』黒・青本

『猫嫁入』黄表紙、市場通笑著、鳥居清長画

以上述べたとおり、赤本のなかでも「鼠の嫁入」は、

長期に渡って扱われた題材で、他の草双子への影響力も大きいものと考えられるのである。以下、赤本「鼠の嫁入」に焦点をあて考察を加えていくこととする。

現存する赤本「鼠の嫁入」には、次の二種類があげられる。^{*6}

①『鼠よめ入』二冊本、十丁、作者・刊年・版元不詳。国会図書館所蔵。

②『ねつみのゑんくみ』二冊本、十丁、西村孫三郎(重信)作、刊年・版元不詳。国会図書館所蔵。

①②の内容構成を表にして以下に示した。それぞれ画面に描き出された内容によって①は九個②は十一個の場面に分け、各場面にあたる丁数をその下に記入している。

内 容 項 目	相当する場面と丁数
結納前	(1) 祝儀前の掃除
	(1) 一丁才 白鼠の尉と姥 町茶屋での見合 一丁ウレ二丁才
話 仲人による縁談	(2) 二丁ウレ三丁才

結納の品々が届く	(2) 一丁ウ <small>レ</small> 二丁オ	(2) 三丁ウ <small>レ</small> 四丁オ
結納を届けた者の接待	(3) 二丁ウ <small>レ</small> 三丁オ	
化粧・着物の支度	(4) 三丁ウ <small>レ</small> 四丁オ	(4) 三丁ウ <small>レ</small> 四丁オ
荷送り		(5) 四丁ウ <small>レ</small> 五丁オ
台所で料理の支度	(5) 四丁ウ <small>レ</small> 五丁オ	(5) 四丁ウ <small>レ</small> 五丁オ
嫁入行列	(6) 五丁ウ <small>レ</small> 八丁オ	(6) 五丁ウ <small>レ</small> 六丁オ
婚礼式	(7) 八丁ウ <small>レ</small> 九丁オ	(7) 六丁ウ <small>レ</small> 七丁オ
出産・産湯	(8) 九丁ウ <small>レ</small> 十丁オ	(8) 七丁ウ <small>レ</small> 八丁オ
宮参り	(9) 十丁ウ	(9) 八丁ウ <small>レ</small> 九丁オ
	(10) 九丁ウ <small>レ</small> 十丁オ	
	(11) 十丁ウ	

を昔咄やお伽ばなしをとりあげた「物語體」と、物語の筋は問題とせず何盡し、何揃えの形で一つのテーマに合わせて各画面を集めた「節用體」とに分類している。^{*7}この分類を借りるなら、「鼠の嫁入」は①②共に後者に属しているといえよう。鼠を使い、「嫁入」というテーマに即して様々な場面をつなぎ合わせたのがこの赤本なのである。

従つて、次には「嫁入」のテーマに注目することとし、具体的に婚礼のことを説明したものとして婚礼式の解説書と女子用往来物をとりあげ、それらとの関係から「鼠の嫁入」の性格を明らかにしていきたいと考える。

三、婚礼に関する書物

婚礼式—出産—宮参りという婚礼に関する一連の経過をかし、これらの差異を除けば、結納—支度—嫁入行列—

婚礼式—出産—宮参りという婚礼に関する一連の経過を追つていて点で、①②の内容構成は一致していることがわかる。しかも、両者には主人公にあたる者が存在せず、物語の筋がないことも共通している。水谷不倒は、赤本

江戸時代には、婚礼諸式に関して解説した書物が数多く出版されている。また、元禄の頃から広がり始め享保に至つて目覚ましい発達をとげる女子用往来物の多くに「婚姻」に関する記述を散見することができるのである。

以下にそれらの内から主要な書物を年代順に記し、それ
ぞれの内容・性格を略述する。^{*8}

書名・刊年	婚礼諸式に関する記述の仕方及び内容
女諸礼集 万治三 (一六六〇)	全六卷の内、三之巻「嫁取云入真草の次第よ め入の次第」四之巻「眞の祝言の次第・草の 祝言の次第」とし、結納・嫁入行列・輿入請 取・祝言の様子を図示する。
女用訓蒙図彙 貞享四 (一六八七)	序に「……祝言は人の大式として此作法すぐ なからず、これによりてその品々の道具・駢 方・風流の姿を記し集めて図にあらわし詞に のべ、女用訓蒙図彙と名づくるものならし。」 とあり、五巻をあらわす。内一之巻は嫁入の 絵を付し、嫁入道具に因んで女子用の器財・ 衣服などを図示する。
女重宝記大成 元禄五 (一六九二)	全五巻の内二之巻を祝言にあてる。(○祝言の 次第(女は嫁して舅姑につくし夫を敬い下々 をあわれむこと)(○嫁取云入・日取の事(○祝 言道具の次第(行列・嫁迎えの様子を図示) (○祝言座の次第(婚礼式を図示)他、女中よ

繪本婚礼手引	光源氏六十帖注釈の他、女風俗教訓図・女不 正徳三 (一七一三)	光源氏六十帖注釈の他、女風俗教訓図・女不 正徳三 (一七一三)	光源氏六十帖注釈の他、女風俗教訓図・女不 正徳三 (一七一三)
女中庸瑪瑙箱 享保十五 (一七二五)	書のはじめに「婚禮之図式」と題して、婚姻 の心構え・式の次第及び懷妊産後の事を解 説。上下二段に分け上に解説、下に結納の 図・笄入・婚礼・同草の図・平産・産神詣の 図を描きいれる。	書のはじめに「婚禮之図式」と題して、婚姻 の心構え・式の次第及び懷妊産後の事を解 説。上下二段に分け上に解説、下に結納の 図・笄入・婚礼・同草の図・平産・産神詣の 図を描きいれる。	書のはじめに「婚禮之図式」と題して、婚姻 の心構え・式の次第及び懷妊産後の事を解 説。上下二段に分け上に解説、下に結納の 図・笄入・婚礼・同草の図・平産・産神詣の 図を描きいれる。
繪本十寸鏡 寛延元 (一七四八)	上・中・下三巻。中巻を婚礼にあて、見合・ 結納・化粧・衣の支度・輿入・婚礼式をあら わし、解説を付す。下巻に出産・産湯の場面 を描く。	上・中・下三巻。中巻を婚礼にあて、見合・ 結納・化粧・衣の支度・輿入・婚礼式をあら わし、解説を付す。下巻に出産・産湯の場面 を描く。	上・中・下三巻。中巻を婚礼にあて、見合・ 結納・化粧・衣の支度・輿入・婚礼式をあら わし、解説を付す。下巻に出産・産湯の場面 を描く。

草

明和六
(一七六九) 「祝言の約束極りて云入のしるしの覚」と題し、結納・婚礼式の次第を絵にし、解説する。他、「女中たしなむべき事」「おはぐろはじめの事」を記す。

女要倭小学

安永二
(一七七三) 下段に女小学。上段に「婚姻の和訓」と題し、婚姻の語義・心構え・祝言の由来・結納の来由・婚礼の式次第・懷妊出産に関する注意を記し、間に結納・荷送り・嫁入行列・台所・婚礼式・出産後の様子を図示する。

嫁入談合柱

寛政一
(一七九〇) 上・下二巻。○婚礼大意の事○日限談合の作法○誓・嫁一生不忘事○母親嫁入お教訓の事○結納に古実ある事○仲人心得の事○以下上中の身分に相応の式法を記し、結納・嫁入行列の図を付す。

婚礼審査袋

寛政七
(一七九五) 序に民用の婚礼仕用を記すとある。○結納の次第・いん物飾り直し様の図○誓方・結納・内披露の事○目録紙の事認様の図○使者の心得・いん物並べ様○同目録差出す心得他、祝儀の衣類用立の事・嫁入道具の事など一九二項目に渡つて列挙。

絵本婚礼道し

るべ
文化十
(一八一三) 序に「夫女子は成長して人の家に行くものなれば心正しく、嫁ては夫につかへ舅姑に孝をなし……」とあり、以下祝儀の場面を絵にし、上部に解説をほどこす。○祝儀の場面。見合・結納の式。嫁入道具・嫁入の式。台所・祝言の座敷。色直し。部屋入の盃ごと。部屋見舞。笄入図。若子出産。袴着を描く。

女今川教玉草

天保十四
(一八四四) 書のはじめに「婚礼式法之次第」と題し、町家の婚姻に関して、上段に解説、下段に見合・結納・化粧・衣の支度・舅姑盃床盃・懷妊・出産誕生・産神宮參を絵であらわす。

女大学操鑑

嘉永四
(一八五二) 下段に女大学を記し、上段に「婚礼式法指南」として、結納・式次第・床飾り・衣類の事を説明し、間に結納・化粧・輿入・婚礼式の絵を入れる。

これらの書物からは、次のような特色が見出せるのではないか。すなわち、

①『女重宝記大成』の○、『絵本婚礼道しるべ』の序にみるよう、婚礼の式法を伝えるに合わせて女子修

養の観念を記している。

②女子用往来物においては、手習い用に「女大学」「女

今川」「女小学」などを中心に据えながら、その上

の段、或いは書物のはじめの数丁に婚姻に関する記述を付置している。

③表の内、『十寸鏡』『婚禮手引草』『婚礼道しるべ』は絵本であるが、絵本以外のものも婚礼に関する一連の場面を絵にあらわして示している。

④『嫁入談合柱』や『婚礼鎗栗袋』をはじめとして、式の次第を細かく具体的に記している。

婚姻の習俗・礼式に関しては各地各様のあり方が慣習によつて継承されているが、出版という伝播形体がようやく定着した都市においては「書物」という形をとつて、婚姻の諸礼が伝え広められているといえよう。しかもその際、女子の嗜みとして説かれていること、また絵や図を付し細かい解説によつて、具体的・視覚的に式法が呈示されていることがうかがえるのである。

四、「鼠の嫁入」の教育的位置

ここで赤本「鼠の嫁入」に目を転じてみると、次のことに気づかされる。すなわち、「鼠の嫁入」①②は婚礼に関する場面の経過を絵で綴つてある点、婚礼に関する解説書や女子用往来物のあり方と重なる。しかも、①②にみられる各場面の図像は、これらの書物に含まれたものと非常によく似通つてゐるのである。

赤本が解説書や往来物を模倣したとはいえないとして、^{*9} 酷似する図像は、両者が何らかの共通性を抱つていたことを示すのではないだろうか。同様の指摘は小谷成子によつても成されている。小谷は、「鼠の嫁入」②の絵師西村孫三郎が、女子用往来物『女今川錦の子宝』や『女用文章』にも筆を採り、そこに赤本と似通つた絵を描いていることから、「絵師の側から眺めて、女子教育の書と『鼠の嫁入』とが共通の基盤に立つていてことがわかる」としている。^{*11} ただし、これら書物における絵

は説明を補完する形で置かれているのに対して、「鼠の嫁入」では絵が全面化され、しかも簡略な説明文さえ付けられてはいない。従って「鼠の嫁入」は、後には女子教育として発達するような内容を、鼠を使い、まず絵を見て楽しむことにより、幼い読み手にも享受しやすい形をとっていると考えられよう。

絵においては以上のような関係が指摘できるが、文字の上ではどうであろうか。前述したように「鼠の嫁入」においては、解説書や往来物にみられる説明文ではなく、

鼠一人々々がせりふを発する形で絵の中に文字が散らし書きにされている。それらのせりふは互いにしつくりとした対話をなししてはいないが、「目録にお引き合わせなされませ」¹² (①(2)) 「これは荒塩酢の物だいたそう」 (④(5)) 「案内したが、ものもう声」 (④(6)) 「若殿様ができたで、おいらが幸せ」 (④(10)) など、それぞれの発することばが、生き生きとその場の雰囲気を表わす働きをしている。解説書や往来物と違って婚礼の次第を知るには不充分であるが、絵と一体となつて婚礼の持つ晴れやか

で賑やかな様子は、よりよくあらわれているといえる。また、注目に値することは、次のような女の鼠のせりふである。

④(4) 「すりつけにご用心」¹³ せな

「三ばかり縫いこんでおがっしゃい」

「急ぐ時は三遍歌をよんでも裁つといひやす」¹⁴ 「そ

れは何という歌でござんす」

⑦ 「被衣のすそをおとりなされませ」

「口をきかずと眼八分に持つて行かさい」「どな

たから据えるのだ」「足元を見て静かに」

⑧ 「胞衣はこうするものだ。よう覚えてござい」

⑨ (8) 「お先静かに」「はいはい」

「どぶ据へやせう」「稽古したこと、もう忘れて

か」

これらのことばはどのように機能しているのであろうか、④(4)三つめの会話を例に考察を試みることにする。

これは、衣を裁つ場面で年上の鼠と年少の鼠が交わしているせりふである。この「衣を裁つ時三遍歌を唱える」

という作法は、次に例示するものをはじめとしていくつかの女子用往来物の中に見受けられることがある。

〈衣を裁つ時の呪歌〉

○天福皆来地福円満 一切諸願皆令満足

○千早振る神の教を我ぞ知るこの宿よりぞ富ぞふりける
朝姫のをしへ初し唐衣裁つたびごとによろこびぞま
す

（『女用文章往らひ帳』『女今川千代見種』『女教訓手

持鑑』『女今川教玉草』『女大学宝箱』など所収）¹³

これらから衣を裁つ時の障りを防ぐために唱えるべき歌が、女子教育の一環として伝えられていたことがわかる。「鼠の嫁入」のせりふはこの歌のことを指していると考えられるが、歌の文句は記されず、ただそのような

教訓上の歌があることを会話の形で浮かびあがらせていくるにすぎない。他の会話にても作法の内容を伝えるのではなく、そのような作法があることを知らせ、或いは思い起こさせる働きをしている。

以上のことを考えあわせると、「鼠の嫁入」は、女子用の教育書と同じく嫁入に因んで女子の嗜みを伝えることを意図しながらも、そこから内容を学ぶというよりはそれを一つのきっかけとする、すなわち女子教育に準じた役割を担っていたと推察できるのである。

五、「鼠の嫁入」の多様性

婚礼に関する解説書や女子用往来物と照らしあわせてみた限りでは、「鼠の嫁入」に女子用の準教育的素材の位置を与えることは不当ではないと考えられる。が、この赤本はその枠内におさまりきれない部分も多分に抱えている。次にそれらにも目を向け、「鼠の嫁入」を今少し広い視野からとらえてみることにする。

前述したように登場する鼠たちは、それぞれ思いくのせりふを発している。従つてせりふの中には、掃除に勤しむ者・台所で料理する者・嫁入道具をかつぐ大勢の奴・つきそいの腰元等の口から出たことばが含まれてい

る。そしてそこには、先にとりあげたようなその場の雰

ら小便だろ」

囮気を如実に伝えるものや、女子の嗜みに触れるものの

他に、次のようなことばが随所にみられるのである。

④(5) 「これを蒸したら酒も飲めやう」

⑤(1) 「朝まで汁椀で飲むぞ」

② 「今夜の御祝儀は大方またぎづつくれるだらう

な」「そんなに聞くなよ。もらうことばかりい
うな」

⑨ 「猫の災難逃れるやうに守りたまへ」

⑥(2) ① 「野良猫に見せて、千両道具じや」

② 「いよころせ、大黒のもうし子め」

③ 「あなたがおきにいるさ山と見へる」

④ 「きつい参詣、腰の巾着よりも化の皮の猫に用

心、用心」

③ ① 「婿の筋目といひ、器量といひ、申し分はない

が、五百両の持參望は胸につかへる」「五百

両は御用達しのねづみ屋にて御借り、御借り」

② 「よふ茶を飲むそっぽめじや。晩には梁の上か

(4) ① 「微塵歯形のない、よい金じや」

② 「落雁の鯛二枚、雛の節句に引いてきたのを知

らぬが仏」

⑤ ① 「鉄漿付けたら、みそっぱとは見へやすい」

「よい歯じや。それではいかな米でもたまるま

い」

② 「いいへ、わしゃ竹之丞ひいき」

③ 「どぶでも模様は光琳がよい」

⑦ 「すこしうてた、刺身にはならずの森のほとと

ぎす」

⑧ 「かたづけ、かたづけ、かたづけとは紺屋の娘

の一盛り、しんぞ一盛」

⑨ 「てんと吉原の初会の客じや」

①(9)・②(2) ①④は鼠の大敵猫を、②(2)②は鼠がつかえ
るとされている大黒天を登場させる。②(4)①は鼠の強勒
な歯と小判を引くという俗信、②は鼠に付与される小さ
な盗人という特性、⑤①はやはり鼠の歯とその習性を、

それぞれせりふの中に盛りこんでいる。これらは、登場人物を鼠に見立てたことで生ずる遊びであろう。

また、(四)(二)(三)は、ことばの調子にあわせて「○○山の……」と続ける当時流行^{はや}の縁語で歌枕の入佐山を嵌めたもの、(七)も同じく「成らぬ」という意味を「糺の森」にひっかけて「成らずの森のほととぎす」とつなげた流行のいいまわしと考えられる。¹⁵(八)は俗謡歌の一種と思われるが、糺屋の型付けと娘が嫁に片付くを掛けでモいるのである。¹⁶(九)は馳走をいたゞくだけの自分の居住まいを「吉原の初会の客のようだ」といあらわしている。

こうしてみてくると、「鼠の嫁入」はその小さな画面の内に、ことばの遊びや世俗的な見方・茶化し・風俗・流行と、実に多彩な要素を含みこんでいるといえるのではないだろうか。前述したように、画面の内容構成やいくつかのせりふから、女子用の教科書につながる意図を内包していたことも確かである。しかし、解説書や往来物が女子を対象に婚礼の諸式を教え伝えることを目的としたのに對し、「鼠の嫁入」はそこから少し離れ、「嫁入」を一つの風俗とみなし、そこに遊びの精神を多彩に盛り込んだ客にお茶を運びながらもらしている陰口を、こんでもいる。そしてそれは、婚礼の当事者に限らず、通りの者や使いの者のせりふをも画面に散らし入れる方法において、可能になつてていると考えられよう。

①(6)(2)の「またぎ」は二百文を指し、(5)(6)のせりふは、料理人や奴の立場から見れば、嫁入も好きな酒を存分に飲め御祝儀をふるまわれる好機会、という世俗的な見方を映し出していると思われる。(四)(三)(2)も、縁談を持ち込んだ客にお茶を運びながらもらしている陰口を、それとなくせりふにしたてている。同じく(3)(1)のせりふは、当時の婚礼に関する記述から推し測れば、金錢のか

らんだ嫁入の裏の面を茶化していることがうかがえる。¹⁸

さらに、(四)(2)(2)の「いよころせ」は、歌舞伎役者にかけ

るほめことば、(五)(2)の「竹之丞」は市村座の人気歌舞伎役者である。¹⁹²⁰同じ画面の「光琳」は、尾形光琳の画流に

ならつて流行った衣の柄「光琳模様」を指していると思われる。²¹

— 52 —

六、結び

のことやことばの持つ裏の意味を味わう、一冊の赤本においてそのような状態が可能であったと仮定することもできようか。

これまで赤本が子どもの読者を対象に据えているとはいわれていたが、どのような点で子どもを視野に入れているか具体的に示されることがほとんどなかつた。この小稿においては、赤本「鼠の嫁入」を対象として検討することにより、婚礼の解説書や女子用往来物の流れとかかわりながら、より幼い者にも享受しやすい形をとり、女子教育に準じたあり方をしていることが確認できた。また、それ以外の様々な要素にも注目することによって、「鼠の嫁入」の抱えている多様性を浮かびあがらせることになったのである。

これらのことを考えあわせると、赤本を幼い子どものものとのみとらえるのではなく、世俗に關けた大人をも対象に含めた幅広いものと考えた方が適つていいと思われる。女子は女子で絵を楽しみながら作法を学ぶこともあり、大人は大人で嫁入にかこつけて描き出される世俗

註

* 1 赤本の発生の時期は、宝永（一七〇四）とする説（水谷不倒「草双紙と読本の研究」『著作集第二巻』中央公論、昭和四八年）、貞享（一六八四）、元禄（一六八八）とする説（小池藤五郎「婦女児童文学、赤本形態の研究」『国語と国文学』第九卷十一号）、寛文（一六六一

し」とする説（鈴木敏夫『江戸の本屋』中公新書、昭和五五年）など諸説あるが、ここでは鈴木の説を引用した。

* 2 絵巻『鼠の草子』には、天理図書館所蔵の一軸・断簡一軸、東京国立博物館の一軸がある。

* 3 小池藤五郎「鼠の嫁入」と児童の心」「幼児の教育」フレーベル館、昭和十二年五月号

瀬田貞二『落穂ひらい』福音館、一九八二年

小谷成子「赤本『鼠の嫁入』とその意義」『愛知県立大学、説林29』一九八二年

* 4 とりあげるにあたり、以下のものを参照した。

山崎麗『日本小説年表』・朝倉無聲『日本小説年表』・国書総目録・小池藤五郎「鼠の嫁入」と児童の心

* 5 山崎麗、前掲年表・水谷不倒、前掲書を参照した。

正確な外題は不詳であるので、この小稿においては以下

「鼠の嫁入」①②として扱う。①②共に刊年不詳である

が、②に関しては、小谷成子は絵師西村孫三郎の他の作品から推し量って「元文（一七三六）から遅くとも安永期（一七七二～一七八〇）にかけての書であろうとしている。（小谷成子、前掲論文）

* 7 水谷不倒、前掲書

* 8 書物を選択するにあたり、国書総目録より版本の多いものに注目すると共に、以下のものを参照した。中山太郎

『日本婚姻史』春陽堂、昭和三年。江馬務「結婚の歴史」

『江馬務著作集第七卷』中央公論、昭和五一年。高群逸枝「日本婚姻史」『高群逸枝全集第六卷』理論社、一九

七五年。石川謙『女子用往来物分類目録』講談社、昭和二一年。なお婚礼の解説書と女子用往来物は、本来部類

を異にするものであるが、ここでは婚礼に関して記したものとして分類せず年代順に列記する。

* 9 地方の婚姻習俗に関しては歴史民俗学の報告するところである。〈例〉柳田國男「婚姻の話」、大間知篤三『婚姻の民俗学』、有賀喜左衛門『婚姻・労働・若者』など。

* 10 前記したように、それ以前に絵巻『鼠の草子』が存在しており、その図像との対応にも無視できないものがある。

小谷成子、前掲論文

* 11 * 12 以下、せりふの引用にあたっては、前記した内容構成を示す表より、当該面の番号を付置する。

* 13 関口富左『女子教育における裁縫の教育史的研究——江戸明治兩時代における裁縫教育を中心として——』家政教育社、昭和五五年参照

* 14 鈴木棠三編『ことば遊び辞典』東京堂、昭和三四年
『日本国語大辞典』小学館より「二百文をいう、駕籠かき・馬子や魚屋の符帳。」

以下のものより、持参金目当ての嫁入が目についていたことがうかがえよう。——「近代の縁組は相生形にもかまはず、付ておこす金性の娘を好む事世の習ひととはなりぬ」西鶴『日本永代藏卷五』、「今の縁組は先づ家筋よりも縁女よりも土産金の多少を論じ……」森山孝盛『賤のをだ巻』、「嫁娶并養子之儀に付て、貧たる作法不可仕事」寛文三年諸子法度及び「近世の俗婚を議するに、或は聘財の多少を論し、或は資装の原簿を論し……」武陽隱士『世事見聞録』(松尾美恵子「近世武家の婚姻・養子と持参金」『学習院史学16』一九八〇年参照)
 * 14. 16. 17. 19. これらに關しては、中央図書館特別文庫の木村八重子氏よりご教示いただいた。

* 20. 21.

『日本国語大辞典』小学館より

『歌舞伎評判記集成』岩波書店、昭和五一年参照

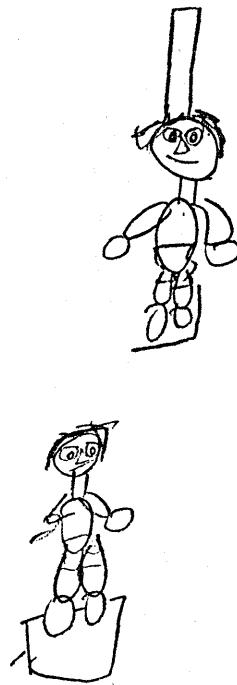


一月二十五日(月曜日) ③ 二天野秀明
今日学校でけんこうしんだんをやりました。

「体重と身長だけ計りました。」

私がすりびとふたね。きう食をたくさん食べながら
なと先生へ。身長の二丈八寸が、身長の二丈七寸
と先生へ。身長の二丈八寸が、身長の二丈七寸
はいどのはくらいいませんでした。」

「どうやス左のかなと思ひます。」



幼稚園における障害児の集団適応の研究

平 岩 定 法・赤 塚
斎 藤 美 代 子・山 口 延 大
小 島 恵 美 代・伊 藤 洋 子
加 藤 道 子

を紹介したい。

【研究の目的】

幼稚園教育を通して、自閉的傾向の強い二人の障害児を各々のクラスの中で、いかに適応させたか、その場合の指導過程を事例分析する。第2に、障害児を受入されたことにより、健常児集団がどのように変化したかをとらえる。第3に、統合保育をすすめる上での改善点について整理する。第4に、障害児が適応していく上で、望ましいカリキュラムのあり方について検討する。

第5に、幼稚園と治療機関の親密な連携について検討する。以上の5点にわたって、二年間の継続研究した内容

【研究の方法】

幼稚園教育における日常保育の指導過程を中心とした具体的な事例の分析——保育者の実践記録を中心に——を共同討議し、問題点の分析、整理を試みる方法ですすめた。実践例は、昭和五十七年、五十八年度の二年間のものである。

【結果】

一、障害児の指導方法についての事例分析

昭和五十七年度の時、3才児であったF君と4才児のY君の二人の事例を中心とした。事例Iの3才男子F児

は、ことばおくれ、独語、多動で、固執行動があり、視線のあわない子であった。年少の一学期では、教師との関係づくりを重点におき、身体接触を心がけ、信頼関係をつくること、二学期は、他の子どもとの関係づけに注意した。三学期は行動と言葉を結びつける努力をした。

具体的な技法としては、ひとつひとつ手をとって、ていねいに教える、遊びの中で面白さを体験させる、世話人グループをつくるなどの試みをした。

事例IIの4才男子Y児は、多動で文字、数字、アルファベットに興味があり、帽子に固執している。ひとりごとが多く、視線があわない子であった。一学期は次の三點に心がけた。

①保育のそれぞれの活動のはじめには、必ず声をかけ、他児と同じ状態にするが、あとは目の届く範囲であれば、自由にする。

②黒板に文字、数字、アルファベットを書くというY児の常同行動を、無理に禁止しないで認める。

③良いことは、悪いことは、はつきりさせ、特に悪いこ

とは表情をかえ、大きな声で注意する。

具体的な技法としては、散歩という活動を用い、教師と手をつなぐことから、他児と手をつなぐようにもつていつた。また、Y児を気にかけてくれる健常児を中心にグループ編成した。Y児からの要求も、はじめは動作で示したが、言葉を教え、言わぬ限り要求には応じないようとした。

Y児が他児の名前を言えるころから、Y児ひとりの問題も、クラスの問題として話し合う機会を多く作つた。その中で、友達に指示されて動くことがわかり、助けられながらも、当番の活動ができるようになる。

二学期では、教師から手ほどなす努力をする。

①特別扱いせずに、子どもたちの中で育てる。②日一度は、かかわりをもち、話をする。園内行事も、積極的に参加させ、集団行動の喜びも体験させた。こうした中から、Y児自身の自発的な意欲も出てくるようになつた。

以上のポイントを基に、集団生活の枠を広げていった。Y児は健常児の中でも大きく成長したが、土台のない集団へ入れるのは、むつかしく、健常児集団も、ある程

度できてからがよい。入園前に、小集団の経験があれば、より効果的である。

いずれにせよ、教師側が障害児を受け入れる寛大な

姿勢をもち、常に子どもの情緒の安定に心がけ、保育することが大切である。確實な積重ねによる生活が基本であり、健常児集団の中で受ける色々な影響によつて育つ力も大きい。

二、障害児の受け入れと健常児集団の変化

私たちが実践し、気づいたり、発見できることを図1にしてみた。「発見ごっこ」では、障害児がクラスに入つたばかりで、彼のとっぽい動きに健常児がとまどう

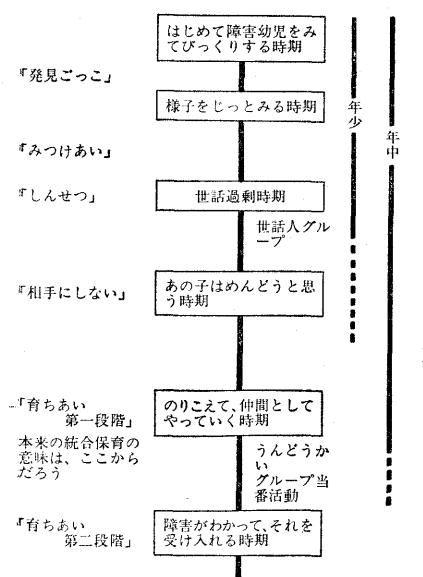
が、ひとつひとつの彼の動きを発見して、その成長を喜ぶようになっていく。「みつけあい」では、いい所をみつけるという気持、思いやりの眼が出てくる。彼は、はじめての友だちづきあいを始めるが、それは発達の遅い子からのようにある。教師の試行で、いわゆるよくわかっている子、親切な子に、彼の面倒をみさせるが、ここで一定の生活ルールをつかんでいく様子があり、「世話係」の役目は大きい。

しかし世話過剰ともいえる「しんせつな時期」がすぎ

ると、彼を相手にしなくなる時期がみられる。これは健常児自身が、仲間と遊びたいという気持が強くなつてくるせいでもあろう。

さて、「育ちあい第一段階」として「のりこえて仲間としてやつっていく時期」と表したが、運動会のリレー等にみられた、彼をなんとかしなければ自分たちがおそらく負けてしまうというギリギリの健常児集団の気持が出るようになったところで、彼との仲間意識が芽ばえてくると思われる。そして、教師が「みんなクラスの仲間

図1 障害児を受け入れる集団の変化



だ」と呼びかけ、障害児について話し合う機会を多くし、「ただの親切ではなく、彼が人間として、しっかりと生活していくようにするのに、今どうしたらいいのか」を問い合わせることで、仲間として認め出していく。

こうした中で、障害児が健常児の「まね」ができるようになつたら、しめたものである。この行動が、健常児たちを刺激し、苦労しながらも、はげまし、教え、彼を育てようとする動きになつてくる。そのことで、健常児自身が、自分や自分たちの事を復習し、整理できていき、ひとつの段階ごとに確実に身につけていくことになる。

ここで健常児集団の年令によつて、障害児の受け入れ方をみると、図1の棒線で表したように、年令の小さいほど、全く同じように扱つてほしいと思つてゐる。障害児に対する教師の集団の中での扱いは、「同じ」であつて、「同じ」でないことのむずかしさがある。また、「ことば」の壁の厚さを感じる。

Y児は三学期で人の話すことばの意味は、ほとんどつかめるが、子ども同士の対話はない。F児は、返事あいさつはでき、単語は言うが、その場に応じて使えない。

「育ちあい第二段階」を発展研究していくとともに、私たちが行つてきている「手さぐり」が何らかの「すじみち」をみつけ出すことで、よりよい統合保育の展開がなされることを大きな希望としている。

三、統合保育をするまでの若干の問題

①幼稚園における教師集団の受入れ体制

幼稚園全体で受入れを承認し、同時に担当者の個性的指導と全体指導を統一させていくことが大切である。

③カリキュラムの有無

幼稚園で受入れ可能な障害児の場合、健常児集団の中でのばすカリキュラムで可能ではなかろうか。

③教師の指導体制の改善

障害児を一人受入れることは、教師の保育観、指導観を大きくゆさぶり、教師の自己革新を迫ることになる。

④実践記録の書き方

障害児の微視的変化を見きわめる力量が要求される。そのためには、日常保育の中で、障害児の記録のみでなく、健常児の発達課題もふまえて記録をとつていくことが望ましい。

⑤自主研修による自己改革

日常保育を整理検討しながら、実践をすすめる必要がある。教師がよく自覚し、自主的な研究会をつくり、研究者もふくめた共同研究体制を創ることが、より一層、教師の発達にこたえることになる。従つて、自主研修の場を保障することが必要である。

⑥幼稚園教育への専門職導入

障害児を受け入れ、成長させていくには、できれば、障害児教育を専攻した専門家を導入することが、より望ましい。

⑦クラス人数と財政負担

健常児集団の中で伸ばすにしても、学級定数の適正化が必要である。その場合、人員確保のための財政負担の改善をどう行なうかである。

四、障害児の集団適応を促すカリキュラムの検討

幼稚園における集団発達の過程において、障害児、健常児の関係をどうとらえていくべきか、について次の四つの視点で研究を進めた。

①健常児カリキュラムの中で、障害児は、どのようなかわり方をしたのか、その過程を年間を通して見る

と同時に、最も顕著な場面を取り上げ、分析してカリキュラムと集団適応のあり方を整理する。

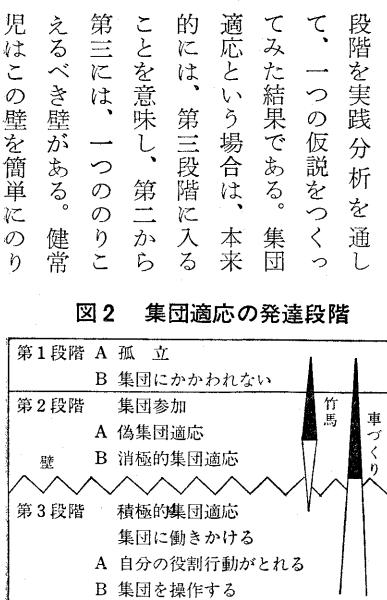
②障害児の集団へのかかわり方の分析をし、集団適応の発達段階と指導方法について考える。

③保育者のかかわり方を分析する。

④附属幼稚園のカリキュラム全体について、その特徴をおさえ、望ましいカリキュラム、その基本について考える。

その結果、自閉的傾向をもつ児童が、健常児集団の中でどのようにかかわるのか、その過程を分析してみた。

図2は、集団適応の発達



こえているようだが、自閉的傾向の児は停滞する。幼稚園の集団に参加した時としなかった時と比較するならば、明らかに集団参加することが基礎となっている。従つて、受入れ可能な幼児の場合には、受入れた方がよい。

次に、年長児の活動の中で、Yにとつて成功した活動として「竹馬のり」の実践、難しい実践として「車づくり」を取り上げて分析、対比した。(図3参照)

竹馬のりの実践のポイントは、教師とYが活動内容、感情の両面にわたり相互に一致して、Yに感動と意欲を盛り上げさせたこと、一対一の対応が後半にかけて盛り上がり、指導も十分にできるようになった点である。

車づくりは、Yの発達をもう一步引き上げることが可能な活動であったが、教師の冷静な対応が、いくつかの活動でかかわりの可能性をひろいあげられなかつた点にある。グループ人数も問題になるが、活動内容自体は、ダイナミックでかかわりの面が多くもてるものであり、悪くはない。

望ましいカリキュラムへの一つの提言として、

①保育者と幼児が一対一の対応ができる上り、自己充

[図3] 事例分析 竹馬のりと車づくりの対比

	竹馬のり	車づくり
保育者と子ども	1対1	1対複数 車をつくり、のってあそぶ(複数の目的)
目的(ねらい)	竹馬にのれること(单一)	グループをつくり、複雑な作業過程を経過
行動過程	1人でのれる	カナヅチ、のこぎり、ドリル、クギ、板、キャスター
道具	竹馬	
作業時間	約1ヶ月	約1ヶ月
保育者とのかかわり方	稀薄→濃厚	稀薄→観察
他の子どもとのかかわり方	応援	共同作業・つきはなし
集団	個人	2グループ→総の12人
指導過程	全体→グループ→1人	グループ→グループ
本人の要求	竹馬にのりたいという意欲	複数の意欲(カナヅチをうちたい、ナンバーをうちたい、ペンキ等)
本人のかかわり方	十分なかかわり	要求のめこぼし(十分にかかわらなかった)
情動	満足=発達の向上	欲求不満=発達の停滞
保育者の姿勢	保育者の意欲が伝わる 保育者の意欲と感動がある 信頼の保育	保育者の意欲が十分伝わらない 保育者は冷静に観察している 観察の保育

実ができることがある。

②大きなダイナミックな活動は、集団とのかかわり場面を多く用意し、それぞれの子どもの要求に応えることができる。

(2)両機関のめざすところの違い

治療室

- | ● 発達観……「しが出来る」という綻軸の発達観 | ● 実践の水準……ミクロに配慮しながら相対的にはマクロ水準での仕事(教育) | ● 評価の視点……集団活動によるように参加出来、課題へのとりくみ達成度はとどうかをとらえる |
|-------------------------|---------------------------------------|---|
| (人間)関係での発達、かがわりの発達という達観 | マクロを見ながら、ミクロでの仕事(心理療法) | 心理構造、精神病理学的、心理療法治のとらえ方で、わば内面をとらえる |
| ● 発達観……「しが出来る」という綻軸の発達観 | ● 実践の水準……ミクロに配慮しながら相対的にはマクロ水準での仕事(教育) | ● 評価の視点……集団活動によるように参加出来、課題へのとりくみ達成度はとどうかをとらえる |

(3)自閉性障害児が幼稚園で示す行動と治療室で示す行

動

五 幼稚園と治療機関の親密なる連携について
ここでは、第一に、自閉性障害児が幼稚園へ通いながら治療室にも通所する時、それぞれの機関の独自性と役割かかわり方について考察した。

(1) 治療室から幼稚園に入園する時期

私たちには、自閉性障害児が、次のような状態になつてゐるのを一応の目安と考えて いる。

①治療者と親密な人間関係が体験

①治療者と親密な人間関係が体験できるようになつてゐること ②親(母)——子関係が親密になつてゐること ③友人(子ども)に対する興味、関心が芽はえており、治療室の中で簡単な集団遊びに興味を持つようになつてゐること。

二九〇

合について見てみよう。Yは入園直前頃に、治療室内では、ほぼ落着いておられる程度にまでなっており、また五～六人の集団での「かごめかごめ」に関心を持ち、参加できる程度にまでなっていた。しかし、入園すると教室外へとび出しが多く、母親の付添いが必要な程度であり、「かごめかごめ」への導入は、全く不可能であった。入園直後は、治療室内で減少していた常同行動が増加し、たつぶりと常同行動をさせないと安定しない状態が続いた。しかし、二ヶ月程すると、Yは治療室、幼稚園の両方において、入園前の水準にまでもどった。これ

は、入園時の大集団状況、ストレスによる不安定さを慣れた場である治療室が支えた例であると言えよう。

次に、事例Fのように、治療室来所と入園が同時期の

場合、治療室が幼稚園でのFの行動を支えるという関係には、なり得てない。

(4)二つの機関の連携のあり方

連携には、一般的に、①情報交換レベル、②症例検討会、研究会レベルの二つが考えられる。前述した両機関の独自性、違いを積極的な意味において理解し合い、障害児の成長発達を見つめ、支え、援助するためには、②のレベルにおける連携が望ましい。

(5)親の指導

両機関の相互信頼が前提にあれば、一般的には、治療室において、母親カウンセリングの場を用意できるので、治療室が親の指導のリーダーシップをとることが望ましい。

中京女子大学
平岩 定法・赤塚 大樹
斎藤美代子・山口 延子
小島恵美代・伊藤 洋子
同附属幼稚園
加藤 道子

☆新年おめでとうござい
ます。講演記録を御寄稿
下さいました三宅廉氏は
『いのちを育くむ』(勤立
社)の御著書によって、
昨年度の日本私立幼稚園
連合会賞を受賞された方
です。なお、この賞には、
いま一本該当者があり、
本誌の発行責任者、本田
和子も『異文化としての
子ども』(紀伊国屋書店)
によって、栄を授けられ
ました。

☆本年は、『子どもの作
文』を適宜、掲載して
いく予定であります。小
学校の教師をしている友
人から借り受けたもので
すが、内容はもとより、
子どもの字の書きぶりや
イラストの、何と魅力に
溢れていることでしょ
う。子どもの進る表現力
は、深い人間への信頼関
係が基盤にあると言われ
ますが、イーヨーにおい
ても、然りでした。(美)

幼児の教育 第八十三卷 第一号

一月号 ◎

定価三〇〇円

昭和五十八年十二月二十五日 印刷

昭和五十九年一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行人 本田 和子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

*万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中!!

保育の再点検 (全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとあ考えの先生方に、きっと役立つ(全5巻)です。

- 本シリーズの特色は、
- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
 - 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
 - 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

A5判・ケース入り・各208頁・セット定価6,750円

近藤充夫 監修

一斉指導で楽しく展開する

幼児の運動 (全3巻)

近藤充夫・中西雄俊・石渡敬一・渡辺真一 共著

- 1、大型遊具を使って
- 2、小型遊具を使って
- 3、かけっこ・プール
・運動会

一斉活動でのびのび育つ幼児の運動遊び集大成。保育を楽しくする画期的な全3巻です！

- 豊富なイラストと適切な文章で、指導の方法が一目でわかります。
- 遊具別に分類されているので、例えば「平均台」でどんな遊びができるか、すぐにわかります。
- 一つの活動に対して応用例がたくさん示されているので、園の実情に合わせたり、創意工夫したりするのに大変役立ちます。
- 「うまくできない子ども」への配慮も充分にしてあるのが、本書の特徴です。

B5判・各200頁・定価各1,800円・セット定価5,400円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

子どもの姿と保育活動を網羅!!

保育のアイデア 春・夏・秋・冬 (全4巻)

関口 準／荒木久子・井尻佳代子・井上道子・岩瀬満佐江・
加藤敏子・川並知子・菊地明子・鶴田一女・富重ミチカ・
中臣浩子・中村鈴子・平山照子 編著

このシリーズは若い先生方を対象としたもので、毎日の保育を充実させる“保育のアイデア”がたくさん盛り込まれています。

それも奇をてらったものではなく、あくまでも現実に即したアドバイスや、保育をすすめるうえでの具体的な指針について紹介され、新鮮でおもしろいアイデア、なるほどと思うアイデアがいっぱいです。

幼児の園生活を春・夏・秋・冬(全四巻)に分けて、それぞれの時期に見られる四歳児と五歳児の、「子どもの姿」の特質を述べ、体験させたい「活動内容」、実際の保育で行なわれた「実践事例」などで構成されています。どの項目も、現実に保育の現場で苦労されている先生方が執筆されていますので、すぐ役に立ちます。

A5判・各280頁・セットケース付・定価各1,500円・セット定価6,000円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館